

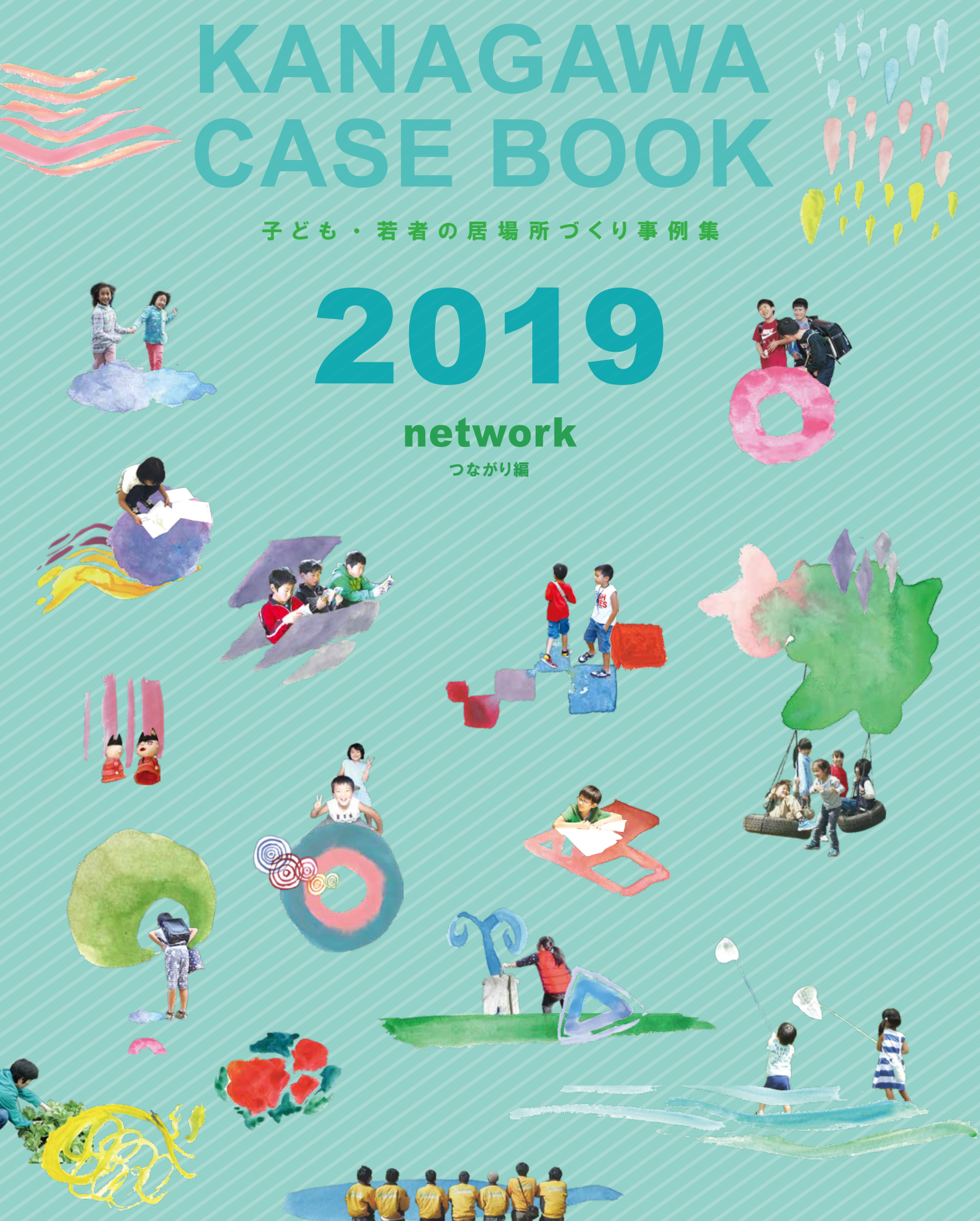
# KANAGAWA CASE BOOK

子ども・若者の居場所づくり事例集

# 2019

## network

つながり編





## 目次



## network

### つながり編

- |           |                                 |     |           |                            |     |
|-----------|---------------------------------|-----|-----------|----------------------------|-----|
| <b>01</b> | いせはらみらい<br>クルリンこども食堂<br>伊勢原市田中  | p6  | <b>07</b> | あおぞら文庫<br>相模原市緑区           | p23 |
| <b>02</b> | 陽向舎 ひなたや<br>藤沢市辻堂               | p8  | <b>08</b> | つばき学習会<br>川崎市内             | p26 |
| <b>03</b> | 在日外国人教育生活相談センター<br>信愛塾<br>横浜市南区 | p10 | <b>09</b> | K2 インターナショナルグループ<br>横浜市磯子区 | p28 |
| <b>04</b> | たまめし食堂+たまふろ<br>大和市鶴間            | p14 | <b>10</b> | にのみや子ども自然塾<br>中郡二宮町        | p32 |
| <b>05</b> | Art Lab Ova アートラボ・オーバ<br>横浜市中区  | p18 | <b>11</b> | こまちぶらす<br>横浜市戸塚区           | p36 |
| <b>06</b> | おだていカフェ<br>小田原市城山               | p20 |           |                            |     |

## 発行に寄せて



「KANAGAWA CASE BOOK 子ども・若者の居場所づくり事例集」

最終号の第3号を皆さんにお届けします。

「居場所づくりに意欲を持ち、子ども・若者と向き合う方々に出会いたい。」

また、これから居場所づくりをされる方々のために

「さまざまな地域、さまざまな居場所を、ご紹介したい。」

そう思い続けた3年間。訪れた居場所は、34ヵ所。

出会った居場所の担い手の方は、数えきれないほど、たくさんになりました。

第3号の居場所事例集のテーマは「ネットワーク＝つながり」です。

地域社会における「つながり」の必要性が高まっています。

人々の暮らしの課題が複雑・多様化していると言われる今日、

人や団体がつながり、互いを知り合い、対話し、

未来につながる地域社会を創造することが求められています。

今号は、「ネットワーク＝つながり」を構築し、育てている

生き活きとした居場所、また、進化し続ける居場所をご紹介したいと思います。

子ども食堂、学習支援、就労支援、多世代交流、

主たる取り組みのジャンルは違っても

子どもや若者を守り、育もうとし続け、実現に近づけている居場所は、

共通に、多様な人や組織とつながり、地域とつながる

豊かな「ネットワーク＝つながり」を持っていました。

是非、多くの方にご覧いただき

改めて居場所の価値を、居場所が地域社会に広がり

多くの子どもや若者たちの拠り所となっていくための

「ネットワーク＝つながり」の価値を観て頂きたいと思います。

### 「子ども・若者の育ちや自立を支える協働事業」

(福)神奈川県社会福祉協議会は、平成28年度より4カ年の活動推進計画に「子ども・若者の育ちや自立を支える協働事業」を位置付けました。この事業は、(福)神奈川県社会福祉協議会、(福)神奈川県共同募金会、(N)よこはま地域福祉研究センターの3者協働により、それぞれの持ち味を生かした事業展開を目指しています。

今回「子ども・若者の居場所づくり事例集」は、既に県内で行われている、子ども・若者の育ちや自立を支える多様な「居場所」を取材し、発足の経緯や活動内容を紹介し、居場所の有用性や居場所のあり方を検討するきっかけに、また、今後、身近な地域にさらに増えていくことが期待される居場所に関わる人が現れることを願って発行します。

### 紹介事例について

第3号「子ども・若者の居場所づくり事例集」で紹介する取り組みは11事例。今号では、居場所が有するネットワークにも視点をおいてインタビューしました。ひとくちにネットワークといっても、立ち上げ期のもの、また、地域の中に定着のためのもの。あるいは、取り組みをより一層豊かにするためのもの等々。それぞれの居場所が、多様な人や団体、組織とつながりを持ち、その力を出し合い、助け合い、居場所を継続・発展させていることも読みとって頂けるのではないかと思います。

また、神奈川県内、9つの市町村で実施されている居場所を選定しており、各事例で掲載している写真からも、さまざまな地域特性を活かした居場所であることがご覧いただけるとと思います。

各事例の表し方としては、本文の他、第1号、第2号と同様、指標①「活動の自己評価」と活動②「活動のプロセス」(すべての事例で紹介していません)を使用しました。

※各事例は2019年8月から9月にかけて取材した時点の内容です。

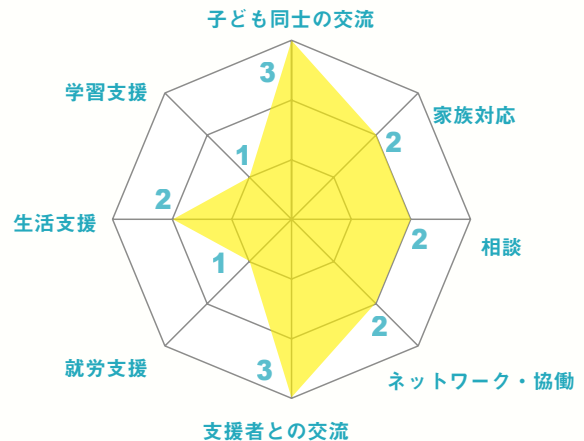
### 各事例に標記している指標について

#### 指標①：活動の自己評価

取材をする中で見えてきたのは、各居場所を運営する団体では、子ども・若者、また、その家族に対して行っている主な取り組みの他にも、見えてきた課題に応じて活動の内容を広げている場合が多いことです。そのため、文中で紹介するだけでなく、「居場所の取り組み指標」を考え、8つの項目を立て、それぞれ実施度を0～3までの4段階にして、活動団体に自己評価していただきました。居場所とは、そこにいる人々の間で、「暮らしを共有」する場でもあり、関わりの中で支援の必要性が生まれたり、それを実行するために外部とのネットワークが広がっていることが分かります。

指標やその項目については、本事例集を編集する段階で考え、第1号から第3号まで共通で使用しています。

#### 活動の自己評価



## 指標②：活動のプロセス

今日の社会で、子ども・若者の育ちや自立を阻む課題がさまざまある中で、居場所を開設した個人や組織は、一様に、その多様な課題に現状把握という形で向き合い、地域における対策の実際などの情報を収集し、具体的な活動を生みだし、実行する中で、独自性のある活動をさらに生みだし、成果を出そうとしています。そして、最終的には、地域社会の課題を改善させたり軽減させることまでをも行っています。

本指標については、取材者がヒアリングをし、行われていることを表に書き出す方法を取りました。現状認識やプロセス上の効果把握等、団体の視点や活動展開の違いに注目してほしいと思います。

### リーダーにフォーカスしたインタビューによる記事

本事例集は、いずれの事例もリーダーに取材申し込みをして聞き取りを行った上での記事です。

「居場所」を運営する団体のリーダーが、どのように今日の社会や地域を、また、子どもや若者を見ているのか。また、どのような取り組みを選択し、どのようなチームを形成して取り組みを行っているのか、できるだけ具体的に表すことを試みました。

### 種別について

取材をしていく中で、複数の要素をもった「居場所」があることが分かりました。明確に分類することは難しいのですが、各活動を分かりやすく伝えるため、下記の10に分類しアイコンとして表示しています。



## 01

## 見守り、支え合いにつながる場所

## いせはらみらい クルリン子ども食堂

伊勢原市田中

クルリン子ども食堂 代表

key person

なかだい かずこ  
中台 和子さん

「では、始めさせていただきます〜。お待ちせしました〜」  
ボランティアの船橋さんが小銭を受け取り、声をかけながら番号札を手渡す

## 老若男女が集う「地域食堂」誕生！

2014（平成26）年6月にスタートした、いせはらみらいクルリン子ども食堂。ボランティアとして地域で活動する中で、子どもたちの居場所の必要性を感じ、「子ども食堂をやる！」と決めて仲間呼び掛けました。すぐにメンバーが集まり、現在のメインボランティア約10名は、立ち上げ時に賛同してくれた仲間です。年代は40〜80代と幅広いですが、最も多いのは60代以上の女性です。

食堂に来てくれる地域の方の中には、2つの仕事を掛け持ちしているが家計はぎりぎり、経済的・精神的に苦しさを抱える親子。また、企業に勤めるお父さんが、うつ病を発症して仕事ができなくなったために、借金を背負って生活している家族もいます。私たちは、学習支援活動と並行して子ども食堂を行っているため、生活が困窮する家庭であることが「わかってしまうケース」もありますが、自然に気兼ねなく来てもらえるようにしていこうとしています。

成人の方、高齢者、ひとりで来る方もいらっしゃいます。家族で食卓を囲んだり、いろいろな食材を使った豊かな献立で、楽しい食生活を体験することが難しい状況の人が多い社会。300円（高校生以下100円）で食べられて、食事を作らなくて良い日があったら、助かる家庭があると思っています。

## 福祉と地域づくりへの関心が原点

ボランティア活動のきっかけは、子ども時代にさかのぼります。私自身は、普通な家庭に育ったのですが、時代的に戦争によって孤児となった子どもが周囲にたくさんいて、支え手のいない中で、自分と同じ子どもの暮らしの悲惨さに、理不尽さや疑問を感じていたと思います。小学校6年生の頃には、私は児童養護施設を創りたいと考えるようになっていたんです。

結婚を機に、暮らすようになった伊勢原で、子育てをしな

がら、手話通訳や点訳を勉強。障害者ボランティアを続け、当事者への活動や障害のある人たちがより暮らしやすい地域づくりに取り組みました。その中で今のNPOの前身となる団体を立ち上げ、本格的に活動を始めました。

地域ボランティアがいるからこそ  
ボランティアの持っているチカラを結集！

メインボランティアが月に一度打ち合わせをして、アイデアを出し合ってメニューを決めます。主婦が多いので、長年の家事経験による知恵や工夫を調理の場面でも発揮。寄附された食材も、美味しく活用します。

また、100食近い食事の提供は、献立作りや調理のチカラだけではできません。大きな鍋などの調理器具、大量の食材、テーブルなどを地下倉庫から出し入れし、手早く設営・撤収してくれるボランティアは、仕事が終わって駆け付けてくれる若手たちです。彼らはまさに、食堂の縁の下の力持ちだと思っています。



## 多様な参加の仕方で活動を守るボランティア

ボランティアは、主体的なものである必要があると思っています。だから、子ども食堂だけのお手伝いをする人もいますし、NPO法人の会員となり、会費を払い、法人が行っている活動全般のボランティアをすることを志す人などいろいろです。団体として、法人の中のそれぞれの活動も、どんな目的で、何をしているのか、わかりやすく周知し、「こんなことがしたい」「こんな活動なら私にもできるかもしれない」などの思いに応えやすくすることが大切なのかなと思います。

## ボランティアと食堂参加費のこと

子ども食堂の利用料300円はボランティアも一旦支払うこととしています。交通費相当分として1回500円をお支払いしていますが、労働対価的な金額では決してありません。

それでも、ボランティア皆で「お疲れさま」と互いに頑張った達成感と共にねぎらい合いたいと思います。そうしたなかでも、今後の活動にと寄附されるボランティアもいます。



PROFILE

NPO法人地域福祉を考える会 副理事長兼事務局長。「人の役に立つ」を原点とした長年の活動が認められ、「神奈川県障害者自立生活者・自立支援功労者」の知事表彰を受賞（2019年10月）。プライベートでは撮りためた海外ドラマを見るのが楽しみ。特にサスペンスドラマがお気に入り。恋愛ものは苦手。旅行も好きで「まとまった休みがとれたら温泉に。美味しいものを食べたりして、リセットする。それが元気の源」と微笑む。



訪れた人と顔見知りになり、声掛けをして、困りごとなどに気づくのもボランティアの力

子ども食堂の運営

活動周知・啓発の重要性と助成金への考え方

民間企業から助成金を受けていますが、あくまで運営補助と考えています。あまり助成金に頼ると、活動主体の私たち自身が、「動かなくなる」と思うんです。食堂の代表として、自分自身の足で動き、地域を回って活動を知ってもらい、支援の輪を広げ続けることが大切だと思っています。

誰にとっても起こりうる身近な社会の問題や、私たちのごく身近に暮らす人たちの困りごとの現実、そして、ほんの少しの寄り添いによって、支えられることをお知らせして、活動の必要性を理解してくださる人を増やしたいのです。

今後、居場所づくりがより発展するために

会場となっている建物が耐震性の問題から取り壊しになることが決まり、次の拠点を探す必要が出てきました。本来、居場所をもっと身近に、たくさん必要だと思っているので、市内のボランティアがそれぞれの居住地区で新たに立ち上げることが進められればという願いも持っています。

でも、「いせはらみらいクルリンこども食堂」は、学習支援と並行して行ってきており、こういう居場所がいつでもオープンしていて、地域の人たちに活用してもらえたら、という想いも湧いてきます。私も年齢を重ねていて、次に託すことも考えますが、町を歩きながら、ついつい、「ここいいなあ」などと考えてしまいます。

居場所の運営について、私のようにいろいろ考えている人がいるのではないかと思います。より良い居場所が地域社会に広がり、豊かな運営がされるためには、知恵を共有できるネットワークがあるといいなあと思います。実際、県央エリアでも市が違くと社会資源や行政の仕組みが全然違います。市を越えて、それぞれの居場所づくりを高め合えたらと思います。

鵜飼 恒雄さん（財務担当理事）

元県社協職員。伊勢原市役所職員時代に伊勢原市社協へ出向していた時、NPOの前身となる団体で活動していた中台さんと知り合いました。市社協の会議室でやっていた勉強会に顔を出すうち、団体の一員に。法人格を取る時の定款作成などを担当しました。子ども食堂や学習支援のスタート時には、資



金調達のため年間10～15件の助成金申請をしたことも。現場は女性が多いですが、法人理事・監事には男性も多く、自身は経理担当として組織を支える活動を続けています。

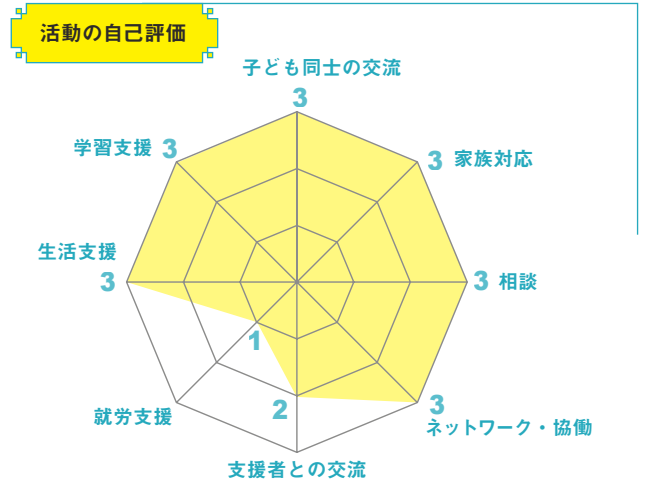
谷亀 弘美さん、治海さん（8歳）

子どもが小学生になってから、スタッフの方からの紹介で利用するようになりました。ここは職場から近く、かつ放課後子ども教室「児童コミュニティークラブ」からも近いので、仕事の後に、子どもを迎えに行きがてら立ち寄ることができます。月に2回、夕飯の準備をしなくてよいのはとても助かっています。子どもの好きなメニューはカレーだそうです。家では食べなかったサバの味噌煮なども、この食堂のおかげで食べるようになったんですよ。



齋藤 美和子さん

折り紙が趣味で、オリジナルの作品を考えて作り、毎回持ってきています。今日は伊勢原市公式イメージキャラクター「クルリン」と、色紙を重ねて作る独楽。もともと作るのが好きで、お子さんたちが喜んでもらえるから、毎回楽しみになってしまってます。ご自由にどうぞ、とまとめてスタッフの方に渡すのですが、手に取った子どもたちが「ありがとう！」と直接言いに来てくれて嬉しいですね。



団体の概要

認定 NPO 法人 地域福祉を考える会



所在地 伊勢原市田中 256 番地の 1-301  
 TEL/FAX 0463-95-6665  
 Eメール office@tiikifukusi.com  
 理事長 宮森 孝史

開設年月日 1992年 任意団体として発足  
 会員数 94名  
 運営財源 会場費+ガス代等、経費は参加費と民間助成金でまかなう。食材や消耗品の寄附、フードバンクにも助けられている。

## 社会をシャッフルする学び場

## 陽向舎 ひなたや

藤沢市辻堂

陽向舎 代表

key person

あそぬま きよと  
阿曾沼 陽登さん

“朝勉強”の風景。テスト前の部活が休みの時には、6時から勉強、7時に朝ごはんを食べ、学校に行く。「朝飯食いに来い」と誘っている

## おでん屋で塾

“おでん屋 ひなた”は、常連さんがよく顔を出す「まちの居酒屋」です。大学生1年生の4月からアルバイトを始めました。「いつかは自分で塾をやりたい」と思っていたのですが、当時は学生だったのでお金もなく、どうしようかなと思っていたときに「店の奥の工房を使っていい、おでん屋で人が集まればどこでもやれるよ」と背中を押してくれたのが店主の卓さんです。その言葉を受けて4年前のお店の定休日に、知り合いの高校生3人を生徒にして陽向舎がスタートしました。

場所代は最初の2年間は免除。大学卒業と同時に「社会人になったから」と言われて月に3万円を払っています。そういうところが卓さんの素敵なところですよ。

## バイトの“きよと”、塾では先生

本当に大切な学びはマニュアル化できないし、対話の中でしか生まれないと思っています。明日の彼らの状態がどうなのかなんて今日は分からないわけで、ある種行き当たりばったりとも言えます。でも、だからこそ僕も日々勉強しているし、勉強してきたという自負があります。例えば、子どもから「人口が減ってほんとに悪いことなの？」という問いが出た時に、僕が何を話せるかということ。そのために意識的にさまざまなコミュニティの、さまざまな立場に身を置いています。おでん屋での「きよと」だったり塾の「先生」だったり。最近はある企業の経営企画も手伝っています。僕との会話を通して彼らの視座を高めてあげられたら、その会話は単なる雑談で



JR辻堂駅3分ほどの小さな路地裏に「おでん屋 ひなた」はある。右は、店主の濱田 卓也さん。

はなく、対話になります。ここでは、ちょっとでも頭を使って帰ってくればいい。ただ、「学校の成績が伸びなければ、(親御さんに)ここを辞めさせられるよ」と言って、勉強もさせています(笑)。

## “臨在”=誰ともいるか

教育の原体験は2つあります。1つは、予備校で受けた物理の授業。講師の圧倒的な“知性”、そして物理そのものをおもしろがる彼らの授業は、学問に対する敬意を抱かせるには十分な体験でした。もう1つは、身近に社会のフロントランナーがいる環境で育ったこと。彼らと食卓を囲み、些細な会話の中でたくさんの問いを抱かせてくれました。“勉強”と“学び”の間を埋めてしまう人の存在。学問とはこういうものなんだ、という本質を伝えてくれた人がいました。たくさんの質の良い問いを持つ人間が身近にいれば、自ずとそういう人間の影響を受けるのです。だからこそ、この“臨在”(誰ともいるか)が、教育には大切なのだと思っているし、僕もそういう存在を目指しています。



栄養バランスのとれた食事は阿曾沼さんの手作り

## 教育におけるジレンマ

経営的には、規模を大きくしないと安定しないと思います。でもこうした「地域の学び場」を大きくすると、学校のヒエラルキーがそのまま持ち込まれる可能性がある。そうなったとき、学校以外の場で居心地の良さを感じたい子どもたちの行き場所がなくなる可能性があります。規模拡大と教育の「濃度」については考えていましたが、子どもたちの居心地、という観点からは、実際やり始めてから気が付きました。

立ち上げて4年目になりますが、補助金や寄附には頼っていません。無料では続かないし、どこかで無責任になってしまうので、価値があると感じてもらえたらきちんと対価を払ってもらおうという考え方です。ただ家庭の状況を鑑みて、特例を設けたりはしています。

## “やさしい”ヤンキーになれ

実はヤンキーって、最強のアクティブラーナーなのではないかと思っています。「なぜ茶髪にしちゃいけないの？」とルールに対して問いを抱き、忸度せず疑問をぶつけて、ときにはアクションにまでもっていく。そう考えるとヤンキーっていいことなんじゃないかと(笑)。今は、大人も子どもに対してぶつからないし、子どももぶつかってまでやりたいことがないから、疑問も持たない。そんな子が多くなっていく社会が果たしていいのか、危機感があります。

2011(平成23)年に東日本大震災が発生し、NPO法人で学習支援ボランティアとして活動していた頃、宮城県の漁師まち、女川町には、「ヤンキー」的な子どもたちがいました。



PROFILE

岡山県倉敷市出身。慶應義塾 SFC 卒業。医学部を目指して多浪後、挫折。北海道にて住み込みで酪農業に従事。2011年の東日本大震災を機に、宮城県女川町で NPO 法人カタリバを通じて、被災した子どもたちの学習支援に関わるようになる。24 歳で大学入学、2018年卒業。現在は、いくつものコミュニティを“はしご”しながら、教育の本質について考え、さまざまな活動に取り組んでいる。2019年ダボス会議グローバルシェイパーズに選出。



集団個別学習の風景。この日は、小学6年生と高校3年生が同じテーブルに並んでいた

ボランティアの大半は、「子どもたちは傷ついているから、全部言うことをきかなきゃいけない」という考えが主流でしたが、ぼく自身は本音で子どもたちにぶつかって話を聞くようにしていたら、ボランティア期間終了後も残って欲しいと誘われ、そのままスタッフとして、約1年間活動しました。

“社会をシャッフルする”学び場

先日、中央官庁の若手キャリアの友人に特別授業に来てもらい、テクノロジーの発展の中で法律を規制する意味や仕事の楽しさ、日々どんなことを考えているかを話してもらいました。講師が帰った後、ある生徒が「ああいう人でもコーラって飲むんですね」と。大人が意図する感想とは全く違うかもしれないですが、これはものすごく大切な気付きだと思っています。おそらく彼らが「普通に」生きていれば出会わなかったであろう、官僚という職業の人間と、ひとつの机を囲み、話し合う。決してレベルの高い質疑応答があったわけではないですが、この生徒は、シンプルに社会に対する「手触り感」のようなものを手に入れることができたのではないのでしょうか。これがぼくが考えている「社会のシャッフル」です。

今の「教育現場」はいろんなコンテンツが出てきていて、飽和状態です。授業料の比較的高い民間教育とその逆の無料学習塾は多くありますが、“その間”にいる多くの子たちに対して、意外とちゃんとしたフォローができてないんじゃないか。うちが出来ているとは言い切れませんが、選択肢としては絶対にあつた方がいいと考えています。

今日の特別授業では学習アルバイトの大学生2人が話をします。これまで何をしてきて、それが今の人生にどう影響を与えているのか。自分の言葉で、自分の観ている世界を説明する。彼らにしか話せないこと、世界の切り取り方があるはずです。陽向舎の強みの1つは、社会的にステイタスのある



大学生が「自分の人生」を小中学生にプレゼンする特別授業

人も含め、ここにきている色々な人たちとコミュニケーションをとれること。人とのつながりによって人生や社会がシャッフルされるきっかけを生みたいのです。

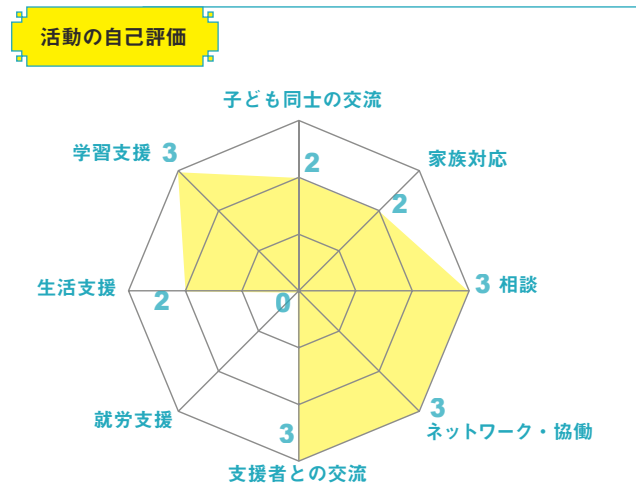
これからのこと

今は、飲食店と学習塾部分が分離していますが、今後は、もっと混在させて、色々な人が集える場所の中に塾がある、という状態にしていきたいと思っています。そして、来た生徒がもっと自由にプログラムを選べるようにしたいです。今日は勉強しようとか、今日はあの人の話を聞こうとか、今日はニュースについてみんなで話してみようとか…。おそらくそういうものが、“学校”になっていくのだと思います。

丸山 璃久さん 大学1年



陽向舎には、高校1年の時に通い始めました。通っていた高校から近く、誘われたのがきっかけです。第一印象は、アットホームで、普通の塾じゃないなということ。ここでは、自分の知りたいことが、それに関連することにまでに拵けて教えてくれる場所なんです。衝撃的だったのは、高3の時の政治経済の授業。1時間半くらい“需要曲線”にまつわる背景を教してもらいました。正直、最初は考えることが辛いと思いました。分からないことを考えたり、自分で知ろうとすることが、陽向舎に来る意味だと思っています。大学生になった今は、月1回の特別授業のときに手伝いに来ています。



団体の概要



陽向舎 ひなたや  
 所在地 辻堂校：藤沢市辻堂 2丁目3-9 (おでん屋 ひなた内)  
 鎌倉校：鎌倉市佐助 1-15-13 (味噌屋 鎌倉 Inoue 内)  
 Eメール info@hinata8.com  
 WEB https://www.facebook.com/ 陽向舎  
 -hinataya--1858427304395895/  
 代表者 阿曾沼 陽登  
 開設年月日 2016年4月

活動日 平日 17:30-21:30 土日 10:00-13:00 特別授業 月1回  
 生徒数 30名 (辻堂20名、鎌倉10名) ※小2～高3  
 スタッフ 学習アルバイト2名  
 利用料金 1回 小学生 2,000円、中学生 2,500円、高校生 3,000円  
 90分 月4回  
 特別授業 2,000円/回 ※受験生は別途料金あり  
 助成金 なし

## 「子どもの命を守る」 いろいろな国の子どもたちの居場所

在日外国人教育生活相談センター

横浜市南区

しんあいじゅく  
信愛塾

信愛塾 センター長

key person



たけかわ まりこ  
竹川 真理子さん

### 信愛塾のロゴマーク

信愛塾が子どもに寄りそい、親に寄りそい、家族に寄りそう。  
親子同士が寄りそう。学校の先生が生徒に寄りそう。地域  
の人が信愛塾に寄りそう。行政が状況に寄りそう。

寄りそう2人のシルエットは肌で感じて体で行動する信愛  
塾の在り方、信愛塾に関わる人の在り方を表しています。

そしてもう1つ。「子どもの居場所を作る」「日本にきた家  
族が生活を営むことができる環境を築けるよう、社会や行政  
に発信する」という信愛塾の「両輪」としてずっと続けてきた  
2つの活動も表しています。寄り添い、手をとりあっているよ  
うな2人の人の形をしたロゴマークにはそれらの意味合いが  
込められています。

(信愛塾ホームページURL <http://shinaijuku.com/> より転載)



### 信愛塾が大事にしていること

「子どもたちが信愛塾から離れていく日のために、本当の  
力、本当の自信をつけて成長していくための支援をしていき  
たい」。信愛塾が一番大事にしているのは「命を守ること」。

当たり前のことに思えるかもしれませんが。でもここに来る  
子どもたちの中には、食べていない、寝ていない、など命の  
保障がされているとは言えない子どもがいます。

信愛塾は、支援対象の子どもの範囲を決めず、子どもの  
生活に丸ごと関わります。年齢の制限などは作らず、どの  
子ども来られるよう、学習支援も相談も無料にしています。

### 信愛塾のある地域

信愛塾は、1978（昭和53）年に在日韓国・朝鮮人の子  
ども会として横浜で誕生しました。在日大韓基督（キリスト）  
教会の活動からの始まりで、クリスチャンが運営の手伝い  
をしていました。私自身もクリスチャンで、1983（昭和58）  
年からボランティアとして勉強を教え始めました。

この地域は、中華街や伊勢佐木町、寿町に近く、昔から  
韓国・朝鮮人をはじめ多くの外国人が暮らしてきた場所。  
近年、外国人が急増する中、近隣の学校では外国にルーツ  
を持つ子どもが生徒数の57.5%のところもあります。横浜  
市中区は8.7人に1人、南区は18.3人に1人が外国籍の住  
民であり、街を歩くと外国語が日常的に耳に飛び込んでき  
ます。

信愛塾に来る子どもたちも、中国やフィリピンなどアジア  
の近隣諸国・地域からの子どもが急増しています。先に来  
日していた親が呼び寄せ、小学生・中学生の年齢で来日す  
る子どもも多く、まず、言葉の壁にぶつかります。言葉や遊  
びなどの文化や育った環境も違う中で、友達とのコミュニ

ケーションがうまくとれず、授業も理解できないため、次第  
に教室で孤立していくこともあります。

また、このような子どもたちの課題は学校生活だけではな  
く、貧困や複雑な家庭環境などさまざまな困難を複合的に  
抱えている場合が多い状況です。

### 子どもの生活を支える

#### 学習支援～ありのままの自分を出すことから始める

学習支援の開催日は、子どもたちが大勢やって来ます。  
テーブルと椅子の数には限りがあるので、中学生以上の子  
どもたちは、小学生の勉強時間が一段落するまで待ってい  
て交代します。勉強を教えてくれるのは、退職した校長先  
生を含む元先生たち。彼らは今でも子どもに勉強を教える  
プロであり、子どもの話を聞くプロです。

子どもにとって信愛塾は安全で安心して過ごせる「居場  
所」です。母語を話せて、日本語も学べて、ありのままの  
自分をさらけ出すことができるから。様子を見に来られた小  
中学校の先生たちが、学校での子どもたちの様子や信愛塾  
での様子があまりに違うのでびっくりされたりすることあり  
ます。勉強の後は、近所の公園でスポーツをしたり、音



学習支援の様子

## 竹川 真理子さん

国家公務員として勤務していた時に、ボランティアで信愛塾に関わり、現在はセンター長として子どもたちや親の支援にあたる。子どもや親の「生活丸ごと」を支援の対象として、必要があれば曜日や時間も関係なく対応する関わりを続けて、26年経った。「ここでは子どもたちが常にかくさん集まるので、時には落ち着かないこともあります。でも、そういう場であるからこそ、子どもたちとの交流が密接に生まれ、私自身の成長につながっている。だから今まで活動を続けられてきた」とこやかに語る。

## スタッフ 福島 周さん

スタッフ兼デザイナー。信愛塾のロゴマーク作成や情報を発信し続けるホームページも福島さんの手によるもの。信愛塾に関わって3年目。「竹川さん取材した新聞記事を読み、こんなすごい人がいるんだ、と信愛塾に来ました。ここに関わっていると問題意識がどんどん生まれてきて、毎日衝撃を受けています」と語る。はにかんだような優しい笑顔の持主。子どもたちと張り合って中国語での掛け算の九九をマスターした。



楽や美術に親しむなどして楽しく過ごし、学校などでの緊張から解放されていきます。

また、信愛塾には、ここで育った先輩たちも訪れます。通訳やボランティアとして活躍している先輩がいて、母語を気軽に使える場となると同時に、彼らの姿が、子どもたちにはロールモデルとして映っていると思います。

子どもたちは、日本語を少しずつ理解できるようになると理科や算数などの教科学習にも興味が湧いていくようになります。やがて、高校や大学受験へとつながっていく。このプロセスを経て、自分に自信を持てるようになり、自己肯定感を取り戻します。最近、フィリピン人の女の子が「竹（竹川）先生は、みんなを愛してくれる。だから、ここは心地いい！」と言ってくれました。

## 生活相談～生活の中のさまざまな相談に対応

信愛塾では、学習支援などの子どもの居場所とともに、多言語対応の生活相談を行っています。子どもたちの抱える困難は、そのまま保護者の課題につながっているため、保護者も支えることが必要になります。保護者からの相談は、仕事や在留資格、役所の手続きなどさまざまです。

最近も「日本人の夫が亡くなり、自分だけで、日本語で相続や年金などの手続きができないから一緒に区役所に行ってほしい」という相談がありました。仕事関係の相談も多く、フィリピン人の母親からの労働災害関係の相談が入りました。ホテルのベッドメイクやその他さまざまな仕事に従事す

る中、最低賃金以下での長期雇用や労災保険にも入っていないなど、劣悪な労働環境で働いていたことが関与して初めてわかることも多くあります。

生活相談の分野は、DV、在留資格、離婚、進路・進学、生活困窮、医療などに広がり、相談件数も毎年増加していて、年間800件を超えています。相談対応の時間や場所もさまざまで、早朝や夜間、役所や学校が休暇期間中の時もあります。

日本人も含め、生きづらい状況がさらに悪化してきていると感じていますが、日本人との大きな違いは、在留資格の問題があることです。働けるのかどうか、生活保護を受けられるのかどうかなど、生活そのものに大きく関わってきます。永住権の取得には、経済的な安定などの要件が必要ですが、満たされていない家庭が多い現状です。

相談の内容は複雑で、専門性も必要とされ、児童相談所、教育や福祉などの行政機関、弁護士、保護司、行政書士、学校、保育所などとの連携は欠かせません。

## 子どもや若者との関係性を育てる

## 生きづらさを「信頼」関係が救う

12歳で日本に来たフィリピン人の女性は、20歳になりましたが、今も、生きることが怖いと言います。アルバイトをしても、フィリピン人だというだけでいじめられ、大学への進学も夢見たけれど叶わなかった。この女性は、今も他の大人や子どもが信愛塾にいると入って来れません。抱

## 団体の概要



## NPO法人在日外国人教育生活相談センター・信愛塾

所在地 横浜市南区中村町 1-1-12-101  
TEL/FAX 045-252-7862  
WEB <http://shinaijuku.com/>  
代表者 理事長 李明忠  
開設年月日 1978年  
利用人数 学習支援/年間延べ2,200人、  
生活相談 800件/年

運営財源 補助金はなく、全て寄附金などの自主財源で運営。信愛塾の活動に賛同し、毎月1,000円を寄附してくれる人などに支えられている。

活動内容 日本に暮らす外国籍および外国にルーツのある子どもたちに「居場所」を利用した学習支援や、その保護者を主な対象に伴走型教育生活相談事業などを行う。活動の中で、言葉や生活面で困難を抱えている在日外国人や外国にルーツのある若者の自立を促し、彼ら・彼女たちの内包する活力を地域社会に発揮できるようにしている。



えているものが多すぎて、自分自身でも受けとめられないから、他者に吐露することも難しいのです。リストカットなど、自分自身を傷つける行為に及ぶ若者も少なくありません。

生きづらさを解消することは容易ではないけれど、信愛塾では、子どもの話に全力で耳を傾けます。たとえ子どもが嘘をついているとわかっていても聴きます。嘘をついていることはわからないふりをしてでも聴きます。あなたを理解しようとしている、ということを示します。

他者を信頼できない。それは、子どもや若者に常に不安をもたらします。だから、子どもの話を聴くとき、10のうち9は聴き、1つ分だけ私自身のことを話します。寄り添い、受けとめ、少しずつ「信じて頼る」ことができる信頼関係を作っていこうとしています。

### コミュニケーションを豊かにする

信愛塾では、中国語、英語、韓国語、タガログ語、日本語などさまざまな言語が飛び交ってにぎやかです。すべての言語が理解できるスーパースタッフというわけにはいかなけれど、子どもたちとコミュニケーションができるようにと、中国語の九九を覚えたり、いろいろ工夫をします。実際、子どもと共有できることがあると、子どもとの距離が一気に縮まって関わりが深くなっていきます。

信愛塾の子どもは、あいさつもできない、と言われることもあります。教えてあげればできます。あいさつができれば、スタッフとも、信愛塾以外の場でも、人との関係が取りやすくなります。コミュニケーションが取れる力をつけることは、大事な使命だと思っています。

### 誤った情報による子どもへの影響防止

子どもたちの保護者が日本語を理解できない場合、外国人同士の小さなコミュニティからの情報のみを頼りにしてし

まう場合があります。小さなコミュニティはそこで完結してしまっているから、誤った情報の修正ができません。この情報に、子どもたちが影響を受けてしまいます。例えば、「定時制高校は進学先にふさわしくない」という情報を保護者が得てしまったとき、「〇〇高校の定時制はとていいですよ」と言っても受け入れてもらえないし、定時制に限らず、自分で目標の高校を決めて勉強していても「〇〇高校でないとダメ」と保護者に否定されて自己肯定感が低下してしまうこともあります。

情報については、保護者だけではなく子どもたちも同じ。スマホを持っているけれど、日本語が未熟な子どもが使うと、適切な情報入手ができていないこともたびたびあります。こうした問題は、私たちの目の届きにくいところで起きやすく、視点として持っている必要があると思っています。

### ネットワークが活動を豊かに

子どもや保護者の抱える困難は大きく、それぞれ違います。信愛塾だけでは解決できないことばかり。だからネットワークはとても大切です。

神奈川県弁護士会には外国人部会があり、法的なことでアドバイスを頂いています。民生委員児童委員とも協働しているし、最近は、保護司とのつながりもできました。他にも市役所（福祉、人権、教育など幅広い分野）や大学なども連携しています。

長く活動を継続する中で、在日外国人の支援に理解が得られなかったこともあります。協力者も確実に増えています。私は常に「子どもの利益が優先」と考えているから、あれこれ考える前にすべきと思うことをするし、周りが動かないなら自分で!と解決したこともあります。でも、今は関係機関側から相談されることも多くなり、協力して、子どもの利益のために活動できることはとても嬉しく思っています。



(左) 修学旅行で横浜に来ている小学生に向けた「共生」についてのお話会  
(右) 夏休みの料理教室。1人でも簡単な食事を用意できるように、サンドイッチ作りに挑戦しました



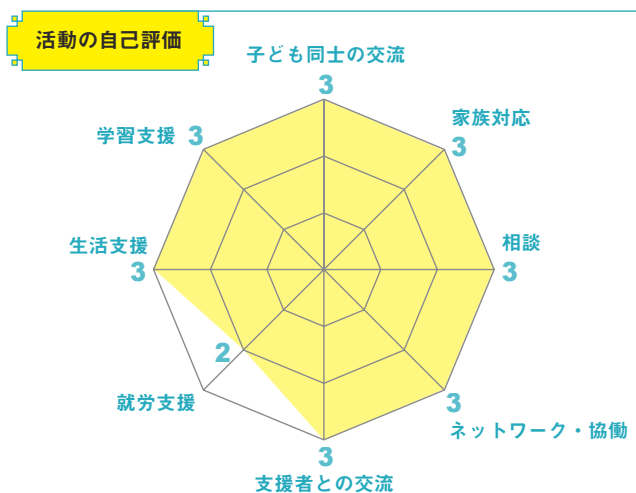
「宿題をしましょう！」  
スタッフが覚え始めた中国語で伝えると、元氣よく「ヤダー！」

専門機関との連携以外にもつながりはたくさんできました。今、高校内カフェができていて、カフェを運営するNGOなどが学校と協力して子どもたちへの支援をしています。こうしたカフェの運営団体が、信愛塾にも果物などを提供してくれています。また、今年の1月から中華街のキッズレストランがご飯の支援をしてくれて、職員が自転車で取りに行って子どもに提供しています。食の協力の例を紹介しましたが、子どもはおなかがすくと我慢できず、つい万引きしてしまう子どもがいます。空腹が解消されればいいわけではなくて、心も満たされないと横道にそれてしまいます。おなかも心も満たすような関わりを、信愛塾と関係機関で連携していきたいと思っています。

### 子どもたちが自信をもって生きていける世の中へ

信愛塾は、昨年創立40周年を迎えました。当初は、在日韓国・朝鮮人の子どもたちが自分たちの文化に誇りを持ち自立してほしい、基礎学力を身に付けてほしいという保護者たちの願いから活動が始まりました。以後、在日外国人と日本人が出会い、お互いを知り、支え合い、共に生きる社会を目指す活動の場として成長してきました。

外国にルーツを持つ子どもたちが生きづらい状況は、今も昔も変わっていません。今年4月の出入国管理及び難民認定法の改定により、子どもや親を取り巻く環境は大きく変化していくことでしょう。その社会状況の中、「子どもの命を守る」ことを一番に、子どもたちが自分のルーツを否定せず、自信をもって生きていけるよう、今後も世の中のまなざしを変えていきたいと思っています。



#### 現状把握

- ・昨今は、日本人も含め、生きづらい状況がさらに悪化してきている。
- ・その中、外国にルーツを持つ子どもたちは、言葉や文化の壁があり、学校や地域社会だけでなく、家庭環境にもさまざまな困難を抱え、緊張やストレスを強いられている。

#### インプット

地域の現状

多くの外国人が暮らしてきた地域だが、近年、近隣の学校では外国にルーツを持つ児童生徒が半数を超えているところもある。

#### アクティビティ

具体的な活動

家でも学校でもない「居場所」で、子どもの母語による学習支援や保護者の生活相談に対応して子どもや保護者たちを支えている。

#### 効果把握

#### アウトプット

産出物

学習支援/年間延べ2,200人利用  
生活相談800件/年  
※伴走型の教育・生活・人権に関わる相談事業を無償・多言語で行っている。

#### アウトカム

活動成果

信愛塾で学習して支えられた経験を持つ子どもたちが大人になり、今は子どもたちを支援する立場になっている。子どもたちは、通訳やボランティアとして活躍している先輩をロールモデルとして将来の夢を膨らませている。

#### インパクト

生じた変化

長く活動を継続する中で、協力者も確実に増え、関係機関と協力して子どもたちへの支援をしている。在日外国人と日本人が出会い、お互いを知り、支え合い、共に生きる社会を目指す活動の場として成長してきている。

## 地域みんなの心と関係を育てる たまめし食堂＋たまふろ

大和市鶴間

NPO 法人ワーカーズコレクティブ・  
チャイルドケア 理事長

NPO 法人サポートハウス・  
ワンピース 理事長

key persons



ながい けいこ 永井 圭子さん  
たきもと みちる 滝本 美知留さん



げた当初から、チャイルドケアとも連携し、一緒にそういう家庭、子どもや保護者を支えてきました。たまめし食堂は、そういうつながりから発足しました。

### たくさんいた“こども食堂”やってみよう！ という想いの人たち

こども食堂をやってみよう！と私たちが発想した同時期、大和市立病院の小児科医や、大和市役所の職員など、さまざまな関係の人たちの中に「こども食堂をやりたい」という声が上がっていることがわかりました。このことは、私たちが“こども食堂”を始める大きなパワーになりました。いろんな「やりたい想い」や「ノウハウ」をもっている人が集まる機会をつくり、なんと、初回の集まり時に、「まずやってみよう！」「やってから考えよう！」と、第1回こども食堂開催日を決定。会議から2、3カ月後の2016（平成28）年7月23日に「たまにはみんなでごはんでも食べよう」と「たまめし食堂」がオープンしました。会場はワンピース。小さなキッチンを使っての調理です。メニューはカレーライス。大人5名、子ども14名の参加でした。参加費は子ども無料、大人200円で、家が遠い子は車で送り迎えもすることにしました。

### 長年の地域活動から“たまめし食堂”の発足に！ 「地域の子どもと子育て家庭を支えたい」（永井さん）

2000（平成12）年、子育て支援のNPO法人「チャイルドケア」を立ち上げました。就学前の子どもたちと保護者が交流し、子育ての相談もさりげなくできる「つどいの広場事業」は、私たちが子どもたちの預かり等をする中で、母親から井戸端会議ができる場所が欲しいとの声を聞き、大和市内2か所で市からの委託事業として実施。2007（平成19）年からは、虐待等、課題のある子どものいる家庭への「養育支援訪問事業」にも携わるようになりました。

たくさんさんの親子との関わりを通して、「地域の子どもたちとその家庭を支えたい」という想いが強くなって、時には居場所、時には家庭に訪問して、子どもたちやお母さん達との関わりは、いつの間にか、私のライフワークになっています。

産前産後の子育てに戸惑うお母さんに寄り添ったり、生活課題がある家庭にお惣菜を持って訪ねたり、活動は続いています。 “こども食堂”という取り組みが地域社会に誕生していることを知って、また、ひとつ新しいチャレンジをすることにしました。

### 「大和市社協のボランティア養成研修受講をきっかけに 地域デビュー」（滝本さん）

25年程前、4人の子育ての真っ最中、大和市社協が主催したコミュニティカレッジを受講しました。社協の佐川さんともそれ以来だから、ずいぶん長いお付き合いになります。

子どもが健康に育つために、家庭の果たす役割が大きいです。子どもを育てることが難しい状況にある家庭が増えてきたことを10年ほど前から深刻に感じていました。そのような支援が必要な家庭については、ワンピースを立ち上

### 長年の地域との関わりのなかで見えていた 「来て欲しい子どもたち」

たまめし食堂には、長年チャイルドケアやワンピースで関わってきた「ぜひ来てほしい」と思う子どもたちやお母さんたちを誘いました。妊婦の頃から関わり、赤ちゃん誕生後、沐浴から離乳食とずっと手伝ってきたお母さんや子ども、病気で寝たきりの母親に代わって毎日保育園に連れて行った子など、10年以上のつきあいのある子どもたちが、小学生や中学生になって来ています。

親子で来る家庭もいれば、子どもだけで参加して、その間、お母さんはホッと一息という利用の仕方をする家庭もあります。思い思いの利用の仕方でのいいのですが、子どもだけで参加ができない場合は迎えに行くようにしています。毎回の利用者は30人くらい。ひとり親家庭が半数以上です。最近では市の家庭子ども相談からの紹介も多くなってきました。月に1回でもたまめし食堂に来ることで、つながり続けられること、どうしているかがわかることがとても貴重だと思っています。



食事の前後は思い思いに遊んで過ごします。おやつを配るお手伝いをする子も

## 永井 圭子さん

NPO 法人ワーカーズコレクティブ・チャイルドケア理事長。ファミリーサポートセンターのほか、つどいの広場事業や養育支援訪問事業に大和市の委託事業として取り組みながら、親子への寄り添いを制度内外問わずライフワークとして行っている。

## 滝本 美知留さん

NPO 法人サポートハウス・ワンピース理事長。4児の子育て中に参加した大和市社会福祉協議会主催のコミュニティカレッジで出会った仲間と子育て支援の広場を立ち上げる。2004年に障がいのある子どもの放課後支援の場として、サポートハウス・ワンピースを設立。



ある日の献立。差し入れのおやつと一緒に

## “たまめし食堂”に来ている子どもたち

**Aくん(小5)** 父子家庭で、新生児の頃から養育支援として関わる。乳児院への入所により一度関わりが切れ、自宅に戻りまた関わったが、小学校入学後、支援としてのつきあいがなくなった。今後の心配も多く、ずっと気になっていた。「たまめし食堂に来てもらえたら、会える関係が続けられる」と思い誘った。一時は親子げんかが絶えなかったが最近ではたまめし食堂でも父の愚痴を聴きつつ、子どもの成長を一緒に喜ぶことができるようになった。

**Bくん(小6)** 母親が妊婦の頃からの関わりで、沐浴からずっとサポートしてきた。本人も母親も他者との人間関係を築くことが苦手で、母親自身が施設で育ち、子どもの育て方も分からない状態の中でやってきた。たまめし食堂には本人はもちろん母親にも来てほしくて誘った。参加し始めた頃、母親はスタッフへのあいさつすらできなかったが、今では他の人と話し手伝う様子も見られる。本人も新しい人と関わられるようになり、人間関係が広がった。また、初めての場所が苦手な本人が、たまめし食堂の会場であるワンピースでは落ち着いて過ごせたことから、ワンピースの利用にもつながった。

**Cくん(中1)** 母子家庭だが、保育園に母親が連れていくことができず、チャイルドケアで送迎をしていた。小学校入学に伴い送迎の関わりはなくなったが、放課後1人で過ごす様子も目立ちずっと心配だった。家で食事を取れていないことも多かったので時々食べ物は届けており、たまめし食堂にも誘った。食堂には親子で参加している。毎月参加しているわけではないが、参加した時はお手伝いする様子も見られ、下の子どもたちと遊び、“たまふろ”の際にはリーダーシップを發揮する一面も見られるようになった。

## “たまめし食堂”への地域からの応援

ボランティアは、私たちの地域の知り合いが中心ですが、市や市社協からの紹介等もあります。

また、たまめし食堂を運営するために必要な、食材等、寄附もいただいている、食堂でも使いますが、参加した親子に持ち帰ってもらうこともしていて、とても喜ばれています。市社協の紹介で、地域の企業から寄附金を、お肉屋さんからお肉を、鍼灸治療院から売り上げの一部の寄附など、さまざまな人や団体に支えていただいています。不定期に野菜を寄附してくれる方もいて、たまめし食堂で活用したり、参加の家庭に配ったり、時には、ボランティアで買い取って活動費に充てたり、皆さんの応援をより良く使う工夫をしています。

こうした地域活動への関わりは、直接子どもや家庭には関われないけど、間接的になれば、応援できることもあること、活動を続けているなかで気づきました。なにより、「自分も何かしたい」と思っている人がたくさん地域にいます。



寄附でいただいた品々。みんなで持ち帰ります

## “たまめし食堂”の成長！

## 参加者が担い手に！「ありがとう」と言われる喜び

丸3年を迎えた“たまめし食堂”。お客さんとして来ていたお母さんが、自分たちも…と手伝ってくれます。集う人たちの役に立ち、感謝され、「ありがとう」と言われた時、嬉しそうです。私たちが、長年関わってきた親子が、たまめし食堂を始めてから、私たち以外の人と出会い、関係がつくれていることは、素晴らしいことと思っています。

## “たまめし食堂”をしたから見えてきた地域ニーズ

「あそこに行くと食事ができるんだって・・・」と紹介されて経済的な課題のある子どもや家族の利用も多くなっていますが、一方、障害のあるお子さん等、子育てに支えを求める家庭との関わりも増えています。広がるニーズに対応するには、会場の広さや、作れる食数の限界などがあり、現

## 団体の概要



## 子ども食堂プロジェクト@やまと

**所在地** 大和市下鶴間 2777-5  
コンフォール鶴間 1階  
**TEL** 090-6952-8255  
**WEB** <http://tamameshishokudo.blogspot.com>  
**代表者** 永井 圭子  
**開設年月日** 2004年4月1日  
**スタッフ** 24名

## 活動内容

## たまめし食堂 &gt;

開催日時：原則として毎月第4日曜日 12:00-14:00  
開催場所：NPO 法人サポートハウス・ワンピース内  
主催：子ども食堂プロジェクト@やまと

## たまふろ &gt;

開催日時：第3火曜日 19:00-

状は人数をセーブせざるをえません。「なんとかしたい」という想いから、食堂には来ていただけないけど届けることならできると考えて、お惣菜や食材を届ける活動もしています。ただ、今後は、食堂の拠点を増やしていくことも、相談しながら考えていくつもりです。

### もうひとつの活動“たまふる”

お風呂に入る習慣がない、家のお風呂が壊れている等の事情でお風呂に入れていない子どもたちのことが、気にかかっていました。居場所の活動をしていると、そういった子どもたちの「匂い」の問題にも気づきます。子どもたちが通う学校や保育園でも、教師や保育士も気づいていると思うし、友達が気づくこともあるかもしれません。そして、その問題が、子どもたちの孤立につながることもと心配でした。

2018（平成30）年11月から、毎月第3火曜日に“たまふる”をスタートさせました。コンセプトは、たまめし食堂と同じ。「たまにはみんなでお風呂に入ろう!」です。“たまふる”で大切にしていることは、「きれいになったね。きもちいいね」を一緒に体験すること。

「いつも清潔にしていきたいな」と月1回のお風呂活動だけど、日常の暮らし

につながっていくことを願っています。お風呂の前には、チャイルドケアの事業所で簡単にみんなでご飯を食べてお風呂屋さんへ向かいます。参加費は無料。食費や入浴料等はたまめし食堂の資金から出しています。子どもたちとスタッフと、みんな一緒に入ります。

### 「気持ちいい!」を実感!

#### 信頼関係を育て深める“たまめし+たまふる”

“たまふる”も早いもので、始めて1年。子どもたちから「気持ちいい!」という言葉が出てくるようになり、お風呂のあとの飲み物も楽しみにしています。でも、初めの頃、湯舟に入った経験がなかった子は、怖がって浴槽に入るのを嫌がったり、髪の毛を洗うのに四苦八苦したりしている子どももいました。長年、子どもや子どものいる家庭を支えてきたのですが、「入浴」というプライベートなところに関わるようになって、一層、子どもたちの暮らしの格差や、想像もできなかった課題を知ることになったと思っています。

「たまには、みんなで一緒にお風呂に入ろう!」は、衛生面の改善だけではなく、心地よい暮らしを実感したり、人と



お風呂上りに乾杯



送迎の一コマ。年下の子に靴を履かせてあげています

人との関係の距離を縮めたり、意義のある活動になっていると感じます。

### 大人になり親になる子どもたち …寄り添い支えることの必要性

長年、地域の子どもや親御さんとの関わりの中で、「子どもを育てる」ということが、とても難しい家庭に遭遇します。子育ての方法というのは、誰かに教えてもらうというよりは、自分が育った家庭での親の在り方や、生活環境から得ることが多いものなのだと感じます。近年は、子育て家庭にもいろいろな問題があると言われていますが、核家族化が進み、地域との関係も薄い中、小さな家庭の小さな人間関係だけではなく、さまざまな人と共に子どもを育てていくことが、いづれ大人になり親になる子どもにとって、とても大切なことと感じます。だからこそ、良かれと思って寄り添おうとすることに「シャッターを下ろされないような関わり」をしていかなくてはと思っています。つながっている細い糸が切れないように…の思いで関わりを続けています。

今、たまめし食堂を利用していた子どもが、高校生になってボランティアとして関わってくれていますが、大人

になって親になるまで、つながっていただけたいと思います。

「人が、健康に育ち、自立した大人になること」は、誰にとっても平坦な道りではありません。私たちは、月に1回でも会っていると様子がわかるのですが、会えなくなると、ちゃんと生活できているか?何か問題に巻き込まれていないか?いろいろと心配になります。中学生や高校生になると、いろんな問題も出てきます。自立も見据えた、学習や就労は大切ですし、小さな子どもよりも対処はとても難しい。

でも、たまめしや“たまふる”に来ている子どもや家庭のSOSには気づける存在でいたいし、地域のチカラも借りながら寄り添いたいと思っています。

### 身近な地域で知り合い 認め合える地域に

鶴間のあたりを「まち」として見て、地域としてももう少し「見える関係」があるとよいと思います。たまめし食堂・“たまふる”の活動をするようになって、地域の商店や企業、お風呂屋さんなど、たくさんのつながりができました。それは、単なるつながりではなくて、顔見知りになって、「また来たね」など、声を掛け合う関係になるというレベルのつながりです。福祉の仕事をする行政や、関係機関でも、「お願いする・される」の関係から、一緒に考える関係になる必要があると思います。

これまで関係してきたお母さんたちの中には、周囲から、「あなたのやり方が悪いから子どもがこんな子になった」などと言われているように感じて、自信を失う人は少なくないです。そんなお母さんたちに、「がんばっているよね」と声をかけられる地域社会が必要です。お互い違いを責めるのではなく、温かく認め合えるように接する人が増えて欲しいです。





非難されることが怖いから、不安だからと嘘を重ねる親御さんもいます。「この人にはありのままを言っても大丈夫」という信頼関係を築いていきたいです。

鈴木さん(大和市職員) 立ち上げメンバー

市民活動支援の担当だった頃に、永井さんと知り合いました。それ以来、別の部署に移っても、子どものこと、子育てのこと、市民活動のことで何かあれば、永井さんと連絡をとっています。僕が“たまめし食堂&たまふろ”に関わっているのは、永井さんや滝本さんに自分の仕事を通して得られたネットワークでサポートすることができるんじゃないかと思ったからです。ふたりの活動なら、きっと子どもにとっても良いことが起こるし、子どもたちが幸せになるに違いないという信頼を持っています。そして、僕自身にとって、子どもや親御さんと身近に関われる場として、“たまめし食堂&たまふろ”は貴重な居場所になっています。



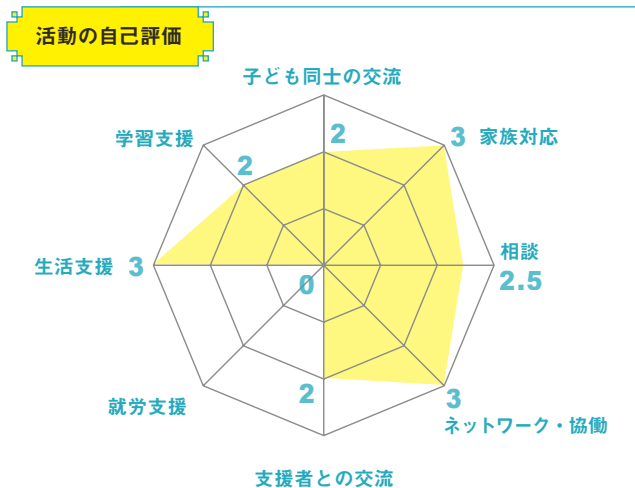
佐川さん(大和市社会福祉協議会職員)

昨今は、さまざまなこども食堂が地域に誕生しています。その中でも、“たまめし食堂”は、相談や、食堂の場に限らない支援の提供など、明確な目的を持つ活動をされています。



このような活動ができているのは、永井さん、滝本さんの長い地域活動の経験によるところがあり、社協としても信頼し、活動を応援しています。

地域には、いろいろなチカラを持つ人がいるけれど、そのチカラを活かすきっかけが見つからない人も多いものです。“たまめし食堂”には、何人かの個人登録ボランティアが関わっていますが、子どもたちの家に、野菜を届ける活動をするようになった人もいて、社協も、こうした地域活動のすそ野を広げるような役割を果たしていきたいと思っています。



現状把握	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ファミリーサポート、養育支援、放課後デイサービス等に関わってきた多くの子どもたちと家庭の現状</li> <li>・現状に対して支援の場でできること、個々でできることに感じていた限界</li> <li>・まちの中で子どもを見守る「場」と「つながり」の必要性</li> </ul>
インプット	<p>地域の現状</p> <p>保育園、学校、行政、NPOの活動とそれぞれで個々に子どもたちと関わってきたが、支援やサービスを前提とする関わりには限界があり、横の連携もより強くする必要性がある。</p>
アクティビティ	<p>具体的な活動</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・月1回のたまめし食堂</li> <li>・送り迎えをボランティアが実施</li> <li>・寄附いただいた食べ物をお土産として配付する他、食堂に参加できない家庭にも配付。</li> <li>・月1回たまふろも開始</li> </ul>
アウトプット	<p>産出物</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2016年7月～2018年7月で計24回開催。</li> <li>・参加人数:大人104名、子ども375名(延べ)</li> <li>・寄附いただいた方々55名から延べ205回</li> <li>・2018年1月～たまめし通信の発行</li> </ul>
アウトカム	<p>活動成果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・多くのボランティアや寄附者と食堂を運営することができている。</li> <li>・子どもや親が、食堂での横のつながりを通じて新たな人間関係を築く力をつけている。</li> <li>・家庭に関わる問題や子どもの将来を共に考える相手が増えた。</li> <li>・これまで関心はあったがきっかけがなかったボランティアにとっての活動の機会となった。</li> </ul>
インパクト	<p>生じた変化</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・これまで個で関わってきた子どもたちに、新たに関わる人が増えたことで、チームで関われるようになった。</li> <li>・参加者として来ていた母親が主体的に手伝う様子や、高学年の子どもが年下の子どもの世話を焼く姿も見られるようになった。</li> </ul>

## 05

「世界」を見ながら「関係」を作る

## Art Lab Ova アートラボ・オーバ

横浜市中区

Art Lab Ova 代表

key person

かげやま  
蔭山ヅルさん スズキクリさん

アートグッズやフリーマーケットの商品がズラリ。  
入口は常に開いていて、子どもたちがぞくぞく現れる

## 演劇の舞台にいるような町

1996（平成8）年、Art Lab Ova（アートラボオーバ）をアーティスト有志による非営利団体として設立しました。初めは、福祉施設や横浜市社協などで出張アトリエを開いていましたが、その後桜木町にある雑居ビルの5階に「13坪のアートセンター」を開設し、時間貸しのアトリエをベースにイベント等を開き、知る人ぞ知る場所として運営していました。

2007（平成19）年から、若葉町（横浜市中区）にある小さな映画館「ジャック & ベティ」に関わり、映画館と地域をつなぐプロジェクトを企画するうちに、映画館1階の空き店舗に拠点を移設して「横浜パラダイス会館（以下、会館）」を開設しました。若葉町はイセザキモールの裏道にあり、一見殺風景に見えますが、アメリカ軍に接收された当時飛行場であったり、一時期は日本一のタイタウンだったなど、視覚化されない戦後の歴史が色濃く残っています。また、知らない人がいつでも飛び込んで来れる路面店は、わたしたちの日常をまるで演劇の舞台にいるようなスリリングな場にしてくれています。

## 世界を知覚する仕事

アーティストって世界を知覚する仕事だと思っています。「人」や「場」に関わり、試行錯誤すると、世の中の状態や枠組みが見えてきます。アート活動の一環として日常的

にフィールドワークをしていると、町に住む外国から来た人たちと出会うこともよくあります。出稼ぎを目的に日本に来た人の多くが、表層的な会話は出来ても読み書きができなかったり、言葉の背後の意味合いや文化を理解できずに困っていたりしていることが見えてきました。支援が必要でも頼れる人がいない。同郷の人同士なら相談できるのかというと、小さなコミュニティの中で弱みを見せると「アイツは金に困っている」などとレッテルを貼られてしまう可能性がある。どこの、誰に助けを求めればいいのかかわからず、生きづらさを抱えて生活している人が、この町に存在しているんです。

中でも特に驚いたのは、海外にルーツのある子どもたちのこと。言語力の問題や、相対的貧困、「食」をはじめとする生活問題など、親の抱える問題が子どもたちに大きく影響しています。例えば、親が日本語の読み書きができないと子どもたちは一見何の不自由もなく喋っているように見えても、やはり読み書きができない。自分の感情をうまく説明できなくてちょっとしたことでパニックになる子もいます。それが知的能力の問題や発達しょうがいの症状と判断されていると感じる事例も見受けられます。

こうした課題を放置して自己責任論として語られがちな社会状況を子どもたちの様子から痛切に感じます。このような現状を知るために、わたしたちは今の活動を続けているのです。

組み立て式の三弦ギター。ボディの絵はフィリピンやネパールの子  
どもたちが描いた

## 子どもたちとふれあうなかで

2013（平成25）年頃から近隣の学校にコンタクトをとり、学習支援のボランティアに参加したりしながら、自らの団体の活動について説明し、理解を得るなかで、2015（平成27）年の夏休みにフィリピンにつながる兄弟の宿題を見守る学習支援を横浜パラダイス会館で始めました。その兄弟が友達に声を掛けて、今では年間実数80人の子どもたちが会館に現れるようになりました。

ブラジル炭火焼肉屋と軒先をシェア。  
いい香りにつられてやってくる子もいる

## 団体 PROFILE

アーティスト・ランの非営利団体。

多文化な下町の映画館のとなりにあるアートスペース「横浜パラダイス会館」を、ブラジル炭火焼肉屋とコンテンポラリーダンサー（夫はモン族）ともシェアしながら、アトリエ、フリーマーケット、喫茶など状況に応じて変化する多目的なスペースとして運営中。また公共施設や福祉施設、公立小中学校でもアトリエを開催し、毎年夏に「よこはま若葉町多文化映画祭」と「横浜下町パラダイスマつり」を同時並行開催している。



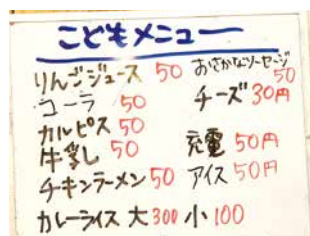
何か特別な支援をしているわけではなく、子どもたちは自由に来て、宿題をしたり、話をしたり、お菓子を食ったり、思い思いに過ごしています。それでも5時を過ぎたら小学生は一人一人、家まで送ってあげています。会館での会話や遊び、そして見送りで立ち寄った家の様子から、子どもたちのニーズや抱える課題を見つけて、必要だと思った支援をしています。会館で子ども食堂を始めたのも、子どもを家へ送った時に、ご飯に塩をかけただけの夕飯を子どもたちだけで食べていて、冷蔵庫の中にお菓子しか入っていなかったのを見て、「ちゃんとした食事が必要だ」と感じたことがきっかけなんです。

### 立ち寄りた時に立ち寄って

メインのスタッフは自分と、Art Lab Ova のメンバーであるスズキクリさんです。他はボランティアとか、活動の中で知り合った人々、オーバの会員、アーティストの仲間などで活動しています。近所に住む人や、会館に立ち寄ってくれた外国の人たち等、ちょっとした出会いが会館の運営を支えています。例えば、子ども食堂のキッチンの整備や改修は、うちの軒先をシェアしているブラジル炭火焼肉屋のお客さんたちが助けてくれました。設備屋さんが図面を引いて助成金があり、水道屋さんも施工を助けてくれました。

そしてそういった人々が生鮮食品やお菓子を寄付してくれています。地方からお米や余った食品、B級品の干物を送ってくれる人もいます。また、現在近所に住んでる女性が月に1回、子どもたちと一緒に調理をしてくれています。ある時には、大量にもらった卵でプリンを作ってきてくれたので、子どもたちが遊んでいる公園に持って行って、突然プリンパーティーになっちゃったりして、すごく盛り上がりました。

会館は扉を開けっ放しにしていて、通りすがりの人、隣で映画を見終わった人とか、ふらりと立ち寄ってくれます。子どもたちもやっく

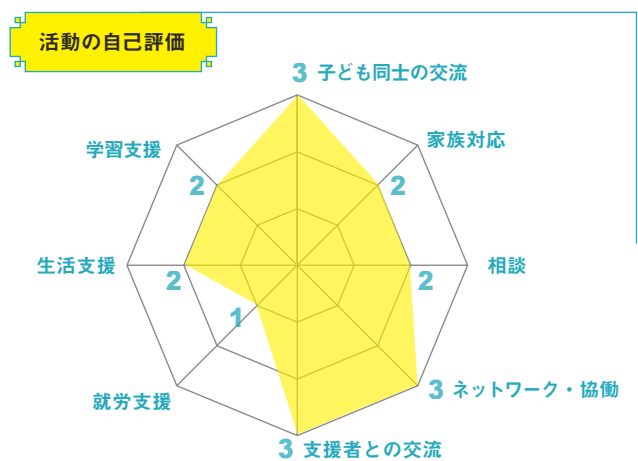


るタイミングはそれぞれ。小学生から中学生まで年齢もさまざま。置いてあるおもちゃで遊んだり、駄菓子コーナーで買い物したり、提供しているお菓子や飲み物を飲んだり、各自が自由に過ごしています。ほとんどの子は、だいたい日本語で話せますが、1、2年前に中国から来た子たちは中国語で話すほうが自分を表現しやすいようです。

開け放った入口はどうやら困った人に特によく見えるようで、見ず知らずの会社員が、仕事で悩んでふらっと入って来たこともあり、今ではまるで古くからの友人か親戚のように付き合っています。夜、子どもたちが帰った後に仕事をしていると、親に家を追い出された子が行き場をなくして来たことも何度かありました。

### 町の住人のひとりであるアーティストとして場を開く

私たちは支援をするために活動をしているわけではありません。結果として支援になっていることもあるかもしれませんが、あくまでもアーティストとしての活動をしているのです。何か目的を持ってしまうと「今ここに在る世界」が見えにくくなってしまうと思うのです。ただの隣人、町の人として存在し、とにかく会館をオープンする。入口が開いているのを見て、子どもも大人もやってくる。そこにまた見えなかった世界が見えてくるかもしれないのです。



## 団体の概要



### Art Lab Ova アートラボオーバ

所在地 横浜市中区若葉町 3-51-3-101  
横浜パラダイス会館  
facebook <https://www.facebook.com/artlabova>  
代表者 スズキクリ、蔭山ツル  
開設年月日 2010年8月

活動日 木金 15:00 ~、土日 14:00 ~  
参加者数 年間実数 2,000 人  
スタッフ ボランティア  
運営費 なかくふれあい助成金、自主事業  
助成金 (財) キュービーみらいたまご財団 (2019 年度)

## 06

## カフェの会話で生徒の困り感をキャッチ おだていカフェ

小田原市城山

key person



おいで けいこ  
生出 恵子さん



### 「おだていカフェ」に来る生徒たち

毎月2回、県立小田原高等学校定時制の食堂を会場にして、おだていカフェを開催しています。カフェを運営している「NPO法人子どもと生活文化協会」は、サポステ<sup>\*</sup>を国と県からの委託事業で実施していて、そこでの就労相談の経験からぜひ定時制高校でカフェを開きたいと思っていました。小田原高校定時制とやり取りを重ねて、2017（平成29）年の秋から、定時制高校の授業が始まる前の時間にカフェを始めました。

カフェを訪れる生徒は、家庭のことや経済的なこと、友人との関係などさまざまな悩みや困難を抱えていて、それらが複合的に絡み合っていることが少なくありません。家庭の経済状況から定期券代や文房具などを自分のアルバイト代で賄う生徒もあり、長時間のアルバイトで疲れて授業に支障が出たり、アルバイト先での人間関係に悩んでいる生徒もいます。また、先日のカフェでは「ストレスがあってしんどい」という生徒に「お家<sup>うち</sup>で何かあったの？」と聞いたら表情が変わったこともありました。

抱えているものが多い生徒たちですが、優しい生徒が多い印象を受けます。毎年夏休み前とクリスマスには、地域のスーパーや「おてらおやつクラブ」からの寄附の調味料やうどんなどの袋詰めをプレゼントしているのですが、生徒はみんな家族思いで「家族が多いから5人で食べられるもの」「お父さんがコーヒーが好きだから」など、自分のことよりも家族のことを思って選ぶ生徒が多いんです。

### コミュニケーションのキャッチボール

あるとき、カフェのおやつに「アーモンドフィッシュがいい」

<sup>\*</sup>サポステ（地域若者サポートステーション）

働くことに悩みを抱える15歳～39歳までの若者に対し、キャリアコンサルタントなどによる専門的な相談、コミュニケーション訓練などのステップアップ、協力企業への就労体験などにより、就労に向けた支援を行っている。

とリクエストがありました。次の回に用意したら、「本当に持ってきてくれたんだ」と満面の笑顔！

生徒は、「覚えていてくれたこと」がうれしい。スタッフは「約束が守れたこと」がうれしい。こんなコミュニケーションのボールを受け取って返したいと思っています。

「想いや願いを伝えても、どーせ（叶わない）…」という生徒が多いと感じています。それは今までの体験からのことであり、カフェの中で小さな約束を積み上げ、「自分の想いを伝える」ことの大切さを知って欲しいと考えています。カフェでの関わりは短い時間ですが、ジュースを飲んでおいしいお菓子を食べながら、アルバイトや家庭での悩みを話して、おなかを少し満たしつつ心が軽くなるとよいと思っています。

カフェでは、一人ぼつんと座っている生徒がいないように心掛けています。こうじゃなきゃいけない、というルールはなく、自分のペースで過ごしてもらえればよい。自分の不安や困りごとを相談するには、相談相手に不安があると話せない。生徒とスタッフが顔見知りとなる中で、相談できる関係を作るのがカフェのやり方です。

カフェは安心して自分のことを出せる居場所。スタッフは生徒の話を聴き、受け止めることで、「あなたのことを気にかけている」というメッセージを伝えます。カフェで気持ちを受け止められ、励まされ、大事にされる体験をしてもらって少しでも生徒を支えたい。月に2回、母親よりも上の世代のおばちゃんたちの愛情を受け取ってもらえればうれしいです。

カフェに来ていた生徒が「カフェがあったから卒業できた」「カフェが終わっちゃうのが寂しい」と、卒業前最後のカフェで言ってくれました。少しでも支えることができたのかな、と思います。



### ネットワークで子どもたちを支える

カフェには、いつも先生が来てくれています。カフェ担当の先生や教頭先生も。先生に勉強を教えてもらったり、普段教室では話せないけど、カフェでは話せる、ということもありますね。

先日のカフェは和やかな雰囲気でしたが、様子気になる生徒がいました。本人は、言葉には出さないけれど、つらい気持ちが表れているのだと思います。生徒の困難は、家庭の状況によることが多いので、スタッフや先生は、家族のことにも関心を持って生徒に関わっています。経済的に厳しい

## PROFILE

おだていカフェ開設当初よりカフェに関わる。カフェを運営する「NPO法人子どもと生活文化協会」のプログラムに自身の子どもが参加し、理念に共感したことが、この仕事を始めたきっかけとなった。「おだていカフェでは、コミュニケーションのキャッチボールを受け取って返して、生徒のみなさんに温かい対応をしたい。月に2回、おばちゃん愛情を受け取ってもらえればうれしい」と笑顔で語る。



おだていカフェとサポステのスタッフのみなさん。  
「その時、その子の悩みに寄り添って、カフェに来ることで気持ちが柔らかくなれば」

家庭の生徒には、お菓子などの食品を持ち帰ってもらうこともあります。

カフェ終了後には、スタッフとカフェ担当の先生方で振り返りのミーティングをしています。スタッフも先生も気づいたことを共有し、気になる生徒への対応を考える大切な時間となっています。

私たちは、ひきこもり支援や相談なども行っているNPO法人のスタッフなので、生活の視点から生徒に関われることが強み。家庭環境に課題のある生徒に、学校での対応で注意することなど、先生から相談されることもあります。カフェを実施する中で、スタッフと先生との信頼関係が築けたことが大きいですね。

生徒の抱える困難は「学校だけ」「カフェだけ」では解決できません。カフェでの会話から、生徒の困り感や小さな不安などをスタッフがていねいに聞き取り、学校や必要な場合には専門機関とも連携を取り、支援できる体制を整えています。さまざまな困難を複合的に抱え、適切な支援を受けないまま中退や不登校、ひきこもりへとつながるリスクを予防し、早期発見に努めています。

また、カフェに来ていてサポステにつながり、就職した生徒もいます。サポステは、アルバイトや就労支援など、学校では対応できない部分への支援をできることが大きいですね。

このようにカフェの運営には、学校やサポステ、行政との連携も欠かせません。今年の秋から県が行う、高校生の中退防止などを目的とした事業にカフェが位置付けられました。カフェから見える生徒たちの課題や必要とされる支援などを、行政と共有しやすくなると思っています。

これからも、育ち盛りの生徒たちのおなかと心をカフェでゆるやかに満たしながら、関係機関と一緒に切れ目のない支援を目指していきます。



## 廣幡 清広先生 県立小田原高等学校定時制 教頭

現在、学校内にある「おだていカフェ」は、生徒たちの居場所の一つとなっています。生徒たちにとって身近な保護者や教員以外の大人と話せる場所は他にはなかなかありません。普段、教室で見せない表情をカフェの中で見せる生徒もおり、カフェのスタッフには教員や保護者とは違った目線で生徒たちと接して欲しいと思っています。

現在の定時制高校に通う生徒は、小・中学校で学校へ行くことができずに悩んでいた生徒や、全日制に入学しても事情があり中途退学して編入した生徒など、さまざまな課題を抱えている生徒も在籍しています。高等学校では、学力を身に付けることはもちろんですが、「自己肯定感や自己有用感を高め、人との信頼関係を築くことができる場と機会があること」や「進学および就労の支援にも関わり自立を促すこと」も必要だと考えています。

しかし、就労や生活面を学校だけで支援することはなかなか難しい現実もあります。そこでカフェを通じて生徒を支援する外部団体との連携が必要になっているのです。2018（平成30）年度から年2回、定時制の全教員とカフェのスタッフで情報交換会を実施しています。学校としての基本理念は「生徒のため」。そのために、カフェを行っている外部団体との連携の意味を全教員が理解しています。また、カフェ終了後の振り返りや情報交換会を通して、教員とカフェのスタッフとの関係性も良好となり、連携がスムーズに行われていると実感しています。

カフェを担当しているNPO法人は、神奈川県西部地域若者サポートステーション（サポステ）の実施団体でもあることから、生徒はサポステが身近となり相談しやすくなっています。担任が面談の中で「サポステに行ってみないか？おだていカフェに来ている人たちだよ」と伝え、複数の生徒がサポステの支援につながり、カフェがあることで切れ目のない支援の輪が広がりつつあると思っています。

## 団体の概要



## NPO法人子どもと生活文化協会（略称CLCA）

所在地 小田原市城山1-6-32 Sビル2階  
TEL 0465-35-8420  
FAX 0465-35-8421  
代表者 理事長 石塚 正孝  
活動内容 不登校・ひきこもりの当事者、家族などを主な対象として事業を実施。  
相談事業、居場所・フリースペース、就労支援事業、自立支援事業、学習支援事業 など

開設年月日 1992年法人設立。2000年NPO法人取得。  
前身は「はじめ塾」（85年の歴史を持つ寄宿生活塾）。  
利用人数 7,000名（2018年実績 法人全体）  
運営財源 会費、寄附金、県委託事業費。カフェで提供するお菓子やカップラーメンなどの軽食は、おてらおやつクラブや地域のスーパーからの寄附。

ある日のカフェの様子



夕方5時前からリュックを背負ったみんながやってきました。夏休み明け初めてのカフェなので、開催は2カ月ぶり。

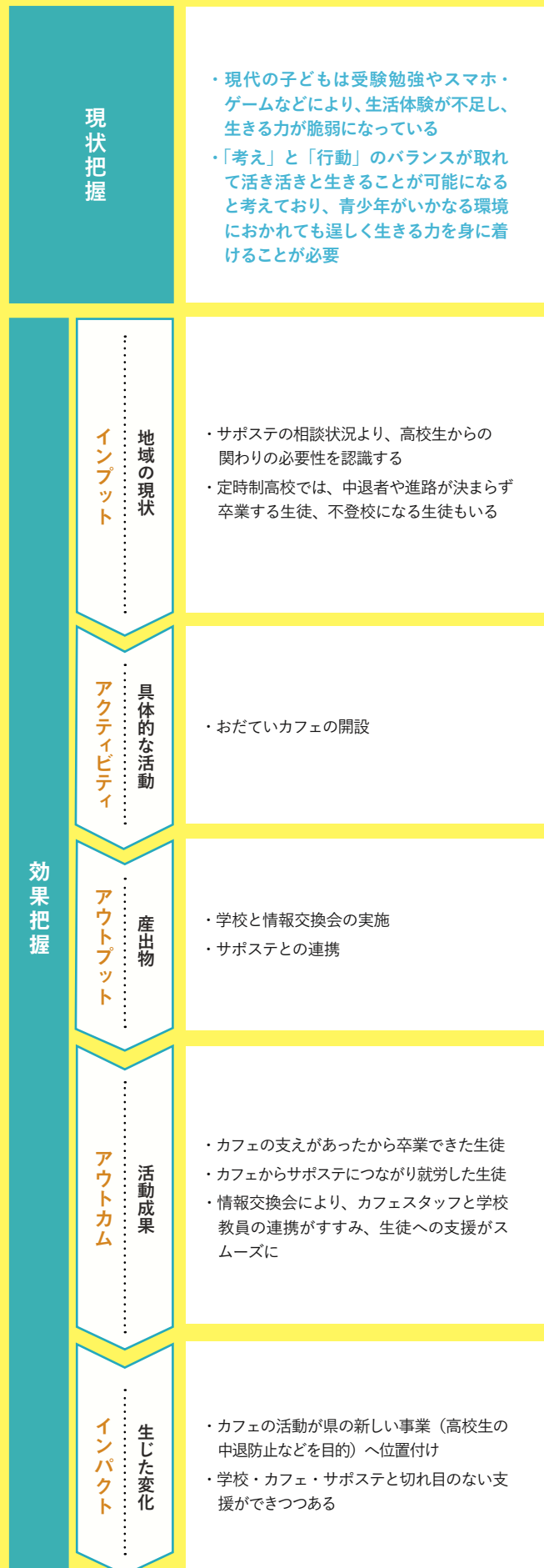
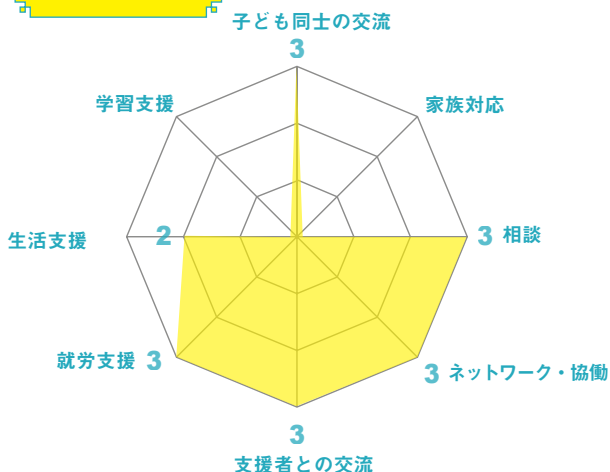
スタッフが「元気だった?」「日焼けしたね」と声をかけ、生徒はスタッフと話しながらお菓子や飲み物を選び、思い思いのテーブルへ。二人で話しながら座っている女子や一人で黙々と焼きそばを食べている男子もいます。

そこへそれぞれスタッフがさりげなく寄り添い話をしています。夏休みのアルバイトや卒業先の進路のことなど。楽しそうに話す生徒、ぼつりぼつりと話す生徒などそれぞれです。先生も一緒に話しているテーブルもあります。

カフェでは、生徒を中心に先生とスタッフのネットワークも自然とできています。とても自然でよい関係性の中で、生徒を支えている様子が見えました。

カフェにいる時間は10分から30分程度。お菓子を食べながら、スタッフとの会話の中で励まされたり、褒められたり。そして、元気に教室に行く生徒たち。ある女子生徒は「もう少しゆっくりいたかったー」、といいながら小走りです教室へ。スタッフがにこやかに見送っている姿が印象的でした。

活動の自己評価



たかぎ よしこ  
高城 佳子さん

## PROFILE

現住所の隣の地区、相模原市緑区青根生まれ。自称精神年齢28歳？結婚前は伊豆大島の児童養護施設や知的障害者支援施設などで働いていた。若い頃から「三度の食事より読書」というくらい本が大好き。「悩んだ時、苦しい時にも本に救われた」「本は心のエッセンス」「地域に図書館が欲しい」という気持ちから、2001年、自宅商店の駐車場にあおぞら文庫を開設。高城商店社長であるご主人、90歳になる元気な義母さんとの3人暮らし。新たにダイビングに挑戦したい！というアクティブウーマン



橋本駅からバスを乗り継ぎ1時間あまり、津久井湖を過ぎ、相模湖の近く、道志川の流れる北丹沢の山あい、焼山登山口バス停近くに、食料品、日用品、酒などを販売する「高城商店」があります。その隣の少し奥まったところ、そこが「あおぞら文庫」です。館長を務めるのは高城商店の奥さん、高城佳子さん。

## 本が大好き！毎日利用できる図書館がほしい！

この地域では公民館にある図書館が毎週金曜日の午後しか利用できませんでした。そこで、毎日、いつでも利用できる図書館が欲しい！と、18年前の2001（平成13）年8月、自宅商店わきの駐車場に主人手作りの2つの本棚に所有している200冊の本を並べ、地域の子どもや住民が自由に読める、貸し出せる私設図書館を開設しました。資金も運営費もゼロからの出発です。

当初は一部の屋根だけで壁もドアもない、文字通り青空の下小さな図書館、雨が降れば本棚にブルーシートを掛けて本が濡れないようにしていました。あおぞら文庫の開設を知った地域の方々、商店の取引先などから、続々と本が集まり、また、本棚の増設や屋根や壁の取り付けなども多くの方々の協力で、徐々にあおぞら文庫の形が整ってきました。小学生のA君は「おばちゃん、ボク本を持ってきてあげるよ」と言って、少年マガジンを3冊持ってきてくれました。最初の小さな協力者です。ホントに嬉しかった。

電気もなかった天井に蛍光灯がつき、寒さを防ぐサッシの扉がつき、みんながくつろげるテーブルやいす、ソファが設置され、あおぞら文庫が子どもたちや地域の憩いの場となっていきました。

## 子どもたちの元気な声が聞こえるあおぞら文庫

開所当時はまだ小学生も近所にたくさんいて、学校が終わると「あお文に行こう！」と誘い合って本やマンガを読み子どもたちが集まっていました。遊ぶ場所がない子や一人で留守番する子どももあおぞら文庫で過ごしました。にぎやかな声が聞こえてくると、商店の店番をしながら、時々お菓子や果物を差し入れたり、いっしょに遊んだり、おしゃべりをしたり、小さい子には絵本を読んであげたり。中学生も部活が休みだったりするとあおぞら文庫で過ごしました。地域の民話を、子どもたちが順番にテープに吹き込む活動もしました。そんな子どもたちも今では大きくなり、進学、就職、結婚とすっかり大人になりました。今では子どもの数も減ってしまい、今年、青野原小学校に入学する1年生は6人ほどしかいません。

## 子どもたちに寄り添い、私にちょっとできることを

このあおぞら文庫で子どもたちとのコミュニケーションをとるのも私の大好きな時間になっていました。あまり差し出がましいことはできませんが、何か支援するということでは



開所当時のあおぞら文庫



お年寄りの文化活動の場にも

高城商店の外観。  
あおぞら文庫は、商店の裏側にある



多くの寄附が集まり、現在は2万冊もの本が並ぶ

なく、普段の生活の中で、ちょっとできること、一緒にできることを続けてきました。

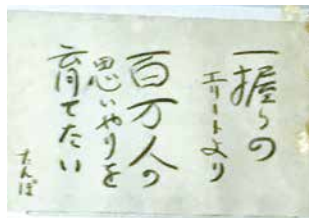
お母さんが入院してしまい、大好きだったおばあちゃんも急死し、父親と二人暮らしになってしまった小4の女の子は、昼はあおぞら文庫、お父さんが帰ってくるまで我が家の居間で一緒に過ごしました。おなかですいた子にはお店のパンを出してあげたりお餅を焼いてあげたりして、私にできることで寄り添ってきました。ちょっとしたことで子どもの心がほっとするのではないのでしょうか。

あおぞら文庫のメモ帳には、その小4の女の子の詩が残されていました。「笑って、泣いてえ、そんな毎日はたいくつに思えるかもしれないけど、それがああるべき姿」

### 運営費ゼロのあおぞら文庫、たくさんの人に支えられて

おかげで、あおぞら文庫の活動でつながった方々から、たくさんの本を寄贈していただいています。近隣だけでなく、ホームページを見て本を贈ってくださる方も多いです。

どろんこ保育で知られている茨城県の岩井保育園、故丹保君枝先生とは、私がファンレターを出したことがきっかけで、ご自分の本が出る



たび寄贈していただきました。あおぞら文庫の壁にある丹保先生の書もこの文庫のために書いて贈っていたものです。

「一握りのエリートより 百万人の思いやりを育てたい」私の大切な言葉です。

それ以外にもあおぞら文庫の活動を知った多くの著者が、ご自分の本を寄贈していただけます。どこからも運営資金を得ずに、まったくのプライベートマネーで運営しているあおぞら文庫ですが、たくさんの温かい心に支えられているからこそ、18年間も続けられているのだと思います。

### コミュニティ活動の場、そして出会いの場

地域のお年寄りが集まり、バザーや文化祭に出展する手芸品や手作りの作成にも利用していただいています。集まったのティータイムやおしゃべりは何よりの情報交換。以前はもっと大勢でしたが、集まるお年寄りは一二人と欠けていきました。あちらもこちらも空き家だらけになってしまいました。

休日はバス便が2往復しかないため、バス待ちの登山者にも利用していただけるようにバス停に看板を出して、あおぞら文庫を宣伝しています。飲食も自由なので、ゆっくり本を読みながら、バス待ちの時間を過ごしてもらっています。

私も以前は山歩きが大好きでしたがひざを痛めて登山が難しくなった今、山の様子や写真を見せていただく、一緒におしゃべりをする、そんな偶然の出会いもあおぞら文庫の楽しみの一つ





です。そしてご自分の本を寄附として置いて行ってくれる方、「がんばって！」とメッセージを書き残してくれる方、帰った後の、箸袋の中にカンパの千円札が入っていたり、そんな優しい心との出会いが何よりもあおぞら文庫の励みになっています。「本が大好き」で始めた文庫ですが、こんなにたくさんのつながりや協力者に会えるとは思っていませんでした。

### 子どもの成長、過疎化の中で、役割を変えて新たな可能性を

18年の間に、地域の様子も子どもたちを取り巻く社会も、時代と共に変わっています。急激に過疎化が進み、橋本には立派な図書館もあり、あおぞら文庫としての役目は変わってきたのかなと思っています。少子化により学校の生徒数が減って、昔のような部活動ができなくなり、子どもたちは放課後、スポーツクラブや学習塾、習い事など地元以外の場所で過ごすことになり、地域でぶらぶらと時間を過ごすことがなくなってしまいました。これも時代の流れですね。

でもまた別の、この場を生かした新しい取り組みができるのではないかと感じています。今までつながった方々が協力者です。

過疎化が激しく、買い物客も減少する中、高城商店では、何か新しい商品をと考え、世界3大健康野菜の1つ、「キクイモ」を栽培し、10年前よりその販売と加工品の製造を始めました。青野原の気候はキクイモの栽培に適しています。キクイモに含まれるイヌリンは血糖値を抑える作用があります。また食物繊維が豊富で大腸の調子を整えたり中性脂肪を減らす作用など、さまざまな効果が実証されています。

生のキクイモだけでなく、粉末、チップス、うどんなどの加工品の開発にも取り組み、店頭だけでなく、通信販売やインターネットで販売しています。最近は県外からも注文が



キクイモ作りのプロ、ご主人と



高城商店オリジナルのキクイモ商品

入るようになりました。横浜や川崎の物産展などにも参加しPRしています。ホームページではさまざまな調理法も紹介しています。あおぞら文庫の場を使って、キクイモの調理法などを取り入れた「料理教室」なども開催し、新たな場づくりをしたいと思っています。

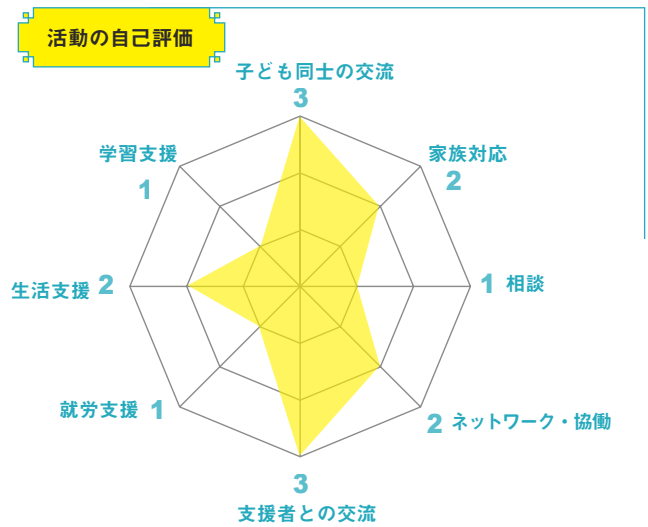
これからも「健康で」「気負わず」続けていきたいです。でもちょっとのお金は必要ですね。

実家に遊びに来たお孫さんを連れておばあちゃんも絵本を借りに来ます。あおぞら文庫に通っていた子どもが都会に出て成人し、結婚してお子さんを連れて文庫に遊びに来てくれます。帰ってきてくれる場であることも嬉しいです。

まだまだやってみたいことはたくさんあります。新しい出会いに、励ましのメッセージに勇気をもらい、できることを楽しみながら、青野原の自然のようにすがすがしく、温かい場で有り続けたいと思っています。

### Fさん ヨガの先生

とっても居心地の良い場所です。佳子さんの明るく温かい人柄もあってホッとできる場。私の寄附した絵本も大切にしてもらい、どんな子が読んでくれるのかなあと楽しみです。佳子さんは、ヨガ教室ではおてんば娘。いつまでも元気で頑張ってください。あおぞら文庫をずっと応援しています。



### 地域の概況



#### 〈相模原市緑区〉

相模原市全体の77%の面積を占め、相模湖、津久井湖、道志川など豊かな水と森の自然に恵まれている。2006年に津久井町と相模湖町が、2007年に城山町と藤野町が相模原市と合併、2010年には相模原市が政令指定都市となり緑区が誕生した。

#### 〈青野原地区〉

津久井湖から道志川をさかのぼった山あいの地域。以前は養豚、酪農、養蚕、農業などが主な産業であったが、現在は高齢化、過疎化によりほとんどが離農を余儀なくされている。人口1530人(年少92人 老齢850人) 高齢化率38.4%(2019.1現在)

### 団体の概要 あおぞら文庫

所在地 相模原市緑区青野原 2924  
 TEL 042-787-0017  
 WEB <http://www8.plala.or.jp/kouya521/>  
 e-mail [kouya-5@cream.plala.or.jp](mailto:kouya-5@cream.plala.or.jp)  
 代表者 高城 佳子  
 開設年月日 2001年8月  
 活動目的 高城商店に併設された私設図書館  
 開設当初は高城さん個人の蔵書200冊余りを置き、地域の子どもや住民に自由に開放  
 活動日 水曜日以外、8時～日没  
 利用料金 無料





会長 吉原 崇徳さん  
 教室長 やまもと みなみ 山本 美波さん  
 事務局兼副会長 いがらし まさる 五十嵐 潤さん



勉強のあとは、自分の好きな遊びをしています

### 子ども・親・教師のサポートを目指して

「今のうちから学習習慣をつけたい」「忙しくても子どもの勉強を応援したい」などの幅広い子どもたち、親たちの声に応えるために、主に小学生を対象に学習支援をしています。プラスアルファのものではなく学校の勉強でわからないところ等の最低限の内容を、高校生から社会人までの多様な大人が1対1で教えています。子どもたちにとって、楽しく、居心地のいい場所で、学習の合間には遊びもいれて、親しみやすく、温かい場所を提供しています。

「つばき」は川崎市民の木で、花言葉は「控えめな優しさ」。どのような子どもにも寄り添って支えられる存在になりたい、という思いが込められています。

親の負担を減らすこと。そして、教育格差を減らすことで、ひいては学校での教師の負担を軽減することも、活動目的の柱に据えています。

### 子どもも大人も 誰が参加するかは限定しない

学習室に来る子どもたちは、保護者の承諾や本人が希望していることが前提ですが、だれでも参加することができます。メンバーも学生、社会人を問わず、学習支援や子どもと接した経験なども問わずに、まずは参加できること、その中で何かできるか、そのために何が必要かを実践の中から探しています。夏休みの自由研究や作文、茶道や調理実習などの企画も開催しています。誰でも参加しやすく、楽しめる内容を工夫しています。

- ・つばき学習室@幸区 毎週
- ・つばき学習室@療育 今年度は月1回 第2土曜日
- ・つばき学習室@養護 今年度は月1回
- ・つばき学習室@川崎区 第2土曜日を除き毎週
- ・つばき学習室@メロディーココ多世代交流スペース 毎週

### 「つばき学習室」～学習も遊びも～

幸区の商店街にあるメロディーココ多世代交流スペースは、平日は地域の人のサロンや会合などにも使われているカフェのような造りの明るいスペースです。土曜日の午前中、教室長の山本さん、三上さん、古賀さんのところへ、小学生の3名が学習にきています。マンツーマンで算数や漢字の学習に取り組み、学校の宿題や教科書の問題を解いています。1時間ほどの学習が終わると、子ども同士遊び始め、メンバーも加わって楽しそうな笑い声が聞こえます。12時になるとお母さんが迎えに来て帰って

いく子などそれぞれに帰宅します。この日のメンバーは全員が20代。小学生との距離も近く、やさしいお兄さんお姉さんとの活動になっています。



勉強のあとは、みんなでトランプ

### 活動後の振り返りがメンバー自身の学びの場に

それぞれのお子さんの困り感に対して、どのようなアプローチができるのかを会のメンバーで話し合います。話し合った結果、わかりやすい教材が必要であるという意見が出て、漢字カードや時計の模型を買うなど、次の学習支援に活かします。また新たな企画のアイデアが生まれることもあるようです。この振り返りのミーティングが活動のヒントや課題に気付くのに役立っています。

メンバーの中には学生からはじめて就職後も活動を続けている人もいます。年齢的に子どもたちと距離が近いメンバーも人生経験の豊富なメンバーも、活動後のミーティングではむしろ子どもたちから学ばせてもらっています。

### スタートは中学生の学習支援

#### でも必要なのは小学生と気づいて

2017（平成29）年に川崎市高津区の生活保護世帯の中学生の学習支援事業がありました。このときに参加した20



終了後はスタッフで集まってミーティング

**吉原 崇徳さん 川崎市小学校教諭**

学生時代に訪れたフィリピンで子どもたちのさまざまな困窮を目の当たりにし、教育の重要性を痛感。帰国後、小学校教諭の資格を取得。仲間と一緒に学習支援を始め、現在は小学校教諭として勤務する傍ら、「つばき学習会」の代表として、学習支援に取り組んでいる。

**五十嵐 潤さん スクールソーシャルワーカー**

塾講師の経験の中で子どもの居場所づくりの必要性を痛感し、社協に入職。学習支援事業の場で後の会長に誘われて活動を開始。現在はスクールソーシャルワーカーとして勤務している傍ら、主に事務局として活動している。

**山本 美波さん 大学生**

大学で、つばき学習会の取り組みを知り、子どもの学習支援が、「子ども」「親」「教師」それぞれにとっての支援になることに共感し活動に参加。学習支援の場で子どもたち、支援者を支えている。

代の学生、社会人のボランティア5人で「つばき学習会」を結成しました。この活動の中で、小学生（それも低学年）のうちに勉強への抵抗感や苦手を克服できたら、その子の学校生活がもっと楽しくなるのではと考え、小学生の学習支援と居場所づくりを始めました。

活動が始まるにあたって、学習支援や子どもの居場所を展開している団体のヒアリングや情報収集を行いました。その中で、川崎市の南部エリアは人口増加や都市化等でニーズが高いことがわかり、幸区での活動を始めました。区の社会福祉協議会（以下、社協）や子ども文化センター（以下、子文）などの協力を得ることができ、積極的に地域の子どものための所へ出向くことになりました。



ペットボトルで噴水をつくらう

**活動に必要な ひと・もの(資金)・場所・情報**

自分たちで活動していくにあたり、川崎市内の区社協に趣旨を理解してもらって、会場を提供してもらいました。また児童養護施設や地域療育センターとの連携も後押ししてもらえました。今年度からはワーカーズコレクティブからも会場を提供してもらっています。

メンバーの登録者は45名（取材時）で高校生、大学生から社会人まで幅広く、50代の方もいます。学生メンバーは、大人とは少し違った立場であったり、子どもとの年齢的な距離感であったり、発想であったりを有効に発揮して活躍してもらっています。また社会貢献や自己実現の場になるということも理解を得やすいように思います。忙しい社会人メンバーには本職とは異なったやりがいを感じてもらえたり、客観的な助言で活動の運営を支えてもらうことも多いです。

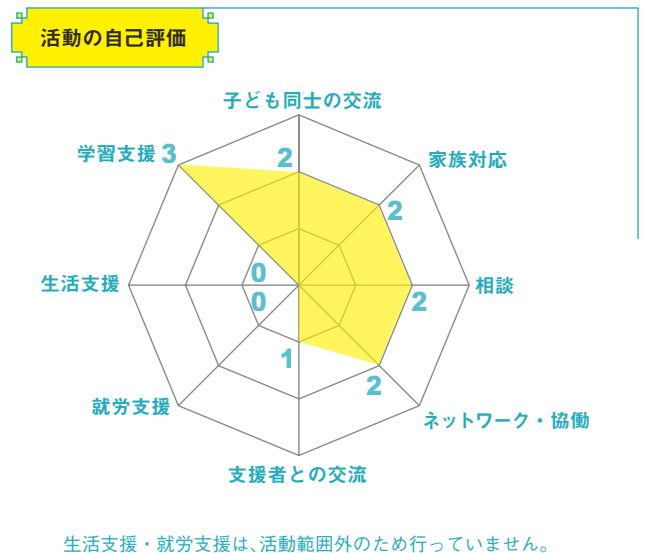
メンバーは交通費だけで活動していますが、他に活動に必要な資金もあり、公益財団などの助成金を申請して得ています。また、イベントや学習支援依頼の際には応援を頂くこともあり、資金源になっています。

中間支援の活動支援事業も積極的に活用し、地域で企画を開催する際は社協や子文に協力してもらおうこともあります。Webやパンフレットのデザインは川崎市民活動センターの支援事業で専修大学の学生によるものです。他の学習支援団体とも情報交換を欠かさず、ボランティア募集サイトに登録した結果、大学生や20代の人からのweb経由の申し込みも多くなっています。



**つながりと広がり これから**

親や学校の負担を軽減して子どもが安心して生活できる社会を目指して活動していますが、地域や学校からの理解（チラシの配架など）を広げるには、一步一步、真摯な積み重ねが必要です。今後も教室を中心に子どもや保護者に向き合い、一人一人に合った対応を続けていくことが重要です。また寄附募集も課題で、メンバーがより積極的に活動できる環境を保証していくことも、今後さらに意識する必要があります。



**団体の概要**



**つばき学習会**

所在地 川崎市内  
 TEL 080-6585-0880 五十嵐（事務局）  
 WEB <https://www.tsubaki-gakushukai.com/>  
 代表者 吉原 崇徳  
 開設年月日 2017年7月22日  
 活動日 毎週土曜日

定員 5～10名  
 スタッフ ボランティア45名  
 利用料金 無料  
 助成金 公益財団法人かながわ生き生き市民基金（2018年度）  
 公益財団法人俱進会（2018年度）

## 若者の生活の場とはたらく場が地域に K2 インターナショナルグループ

横浜市磯子区

株式会社インターナショナルジャパン  
代表取締役

Key person

金森 京子さん



就労継続支援（A型）事業所に認定されている「パン屋のオヤジ」  
ふわふわのコッペパンと具材はすべて手作り。毎朝、数十種類の総菜パンが並ぶ

### 不登校やひきこもりの子ども・若者と共に歩んで30年

1988（昭和63）年、グループの活動を始めて、既に、30年以上の年月が経ちました。JR根岸駅周辺には、K2インターナショナルグループの若者や子どもの生活の場、働く場がたくさんあります。長い年月の間に出会ったさまざまな生きづらさを抱えた若者、一人一人にとって、どんな活動が、どんな場があったら、生きづらさを解消できるだろう、社会の中で生き生きと活動できるよう導けるだろう、そんな想いをもち続けたことで、一つ一つの場が生まれていきました。

また、私たちは、人が成長するために欠かせないことの一つに、「多様な人の中で育つこと」があると考えています。思春期、青年期と続く中、途切れの無い支援を可能にするため、作ってきた場がたくさんあります。現在、K2グループのスタッフの約7割が、不登校やひきこもりの元当事者と元ボランティアです。みんな十人十色の個性があり、これまでの道のりにストーリーがあります。

長い年月、活動を続けてきたからこそその、私たちの目標に向かって共に歩む仲間がいます。

### 子どもや若者支援で大切にしていること

30年前、私たちが活動を始めた頃の支援対象は、一過性の思春期の問題として学校や社会になじめない、10代の不登校児でした。ですが、今日では、10年20年とひきこもり状態を続けた若者が、不就労やコミュニケーション障害、うつなどの精神疾患、家庭内不全といった課題が折り重なり、出口の見えない状態で、私たちに訪ねてきます。どうしたら子どもや若者が元気になれるのか？どうしたら、新しいスター

### PROFILE

出身の大阪で児童養護施設の子どもたちを支える活動等を行う。不登校やひきこもりの活動のきっかけは、高度経済成長期、夫の金森克雄さんが事務局長として勤務していたヨット製造会社の教育部門で、不登校等の子どもの生活課題改善のためのオーストラリアクルーズを実施したことに遡る。学校や社会になじみにくい子どもたちが、長期間のクルーズで、閉じこもりの暮らしから生活が一変し、仲間ができ、金森さんたち引率者との信頼関係が築かれる中で、元気になり、自信を取り戻す姿を目の当たりにしたことが、今の取り組みにつながっている。

トを応援できるのか？子どもや若者を前にして日々考え、実践を続けています。

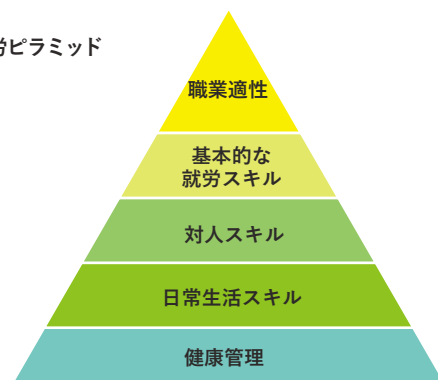
その中で、私たちの支援の柱は、「自信をつける・経験値を上げる・仲間をつくる」こと。そして、若者自身が周囲に助けられながらも尊厳を持って働く（生きる）ためには、やはり最終的には「お金を稼ぐ」ということも重要になってきますので、そのための就労支援にも力を入れています。就労支援の現場で一人一人を見つめていくときに注力していることは「役割・相談・大切」です。「一人一人に役割はあるか・相談する相手はいるか・大切にされていると感じられているか」これは、家庭であっても教育現場であっても重要なことだとスタッフ全員が捉えています。

### いろいろあるから一歩が踏み出せる！大切なきっかけ

今の状態から抜け出したい、でも、どうしたら良いかわからない、立ち直りたい、変わりたい、仲間が欲しい、自立のための一歩を踏み出したい、でも、自信がない…。

そんな若者たちが就労につながり、自立する（＝働き続ける）ためには、積み重ねなければいけないスキルがあります。それを示したのが「就労ピラミッド」です。働き続けるためには、一足飛びに資格をとったりビジネスマナーを学ぶ

### 就労ピラミッド





中間ステップとしての共同生活



にこまるソーシャルファーム

のではなく、まず生活、健康管理が出来るようになることが必要です。K2では、若者に対して図に示す就労ピラミッドの段階それぞれに応じた支援を行います。

例えば、健康管理・日常生活スキルは、若者と支援者で暮らす共同生活の中で身に付けます。対人スキルは、K2のすべての取り組みが、多様な人との関係性の中で行われるので、これまで家族のみがコミュニケーションの対象であった生活とは大きく変化できるようにしなければなりません。

また、就労スキルを身に付け、自分の適性に合った仕事を見出すためには、就労前の職業体験や、自分の適性を見出すための相談をするなど、主体的に考え、活動できるようサポートする必要があります。

### 若者の自立をサポートする主な活動

私たち K2 インターナショナルグループは、グループ内に複数の組織をつくり、それら組織の中でも子どもの育ちや若者の自立に向けてさまざまなプログラムが行われています。とてもたくさんのプログラムがあるので、一部を紹介します。

#### 共同生活寮（横浜市磯子区根岸地区 4棟）

一足飛びにアパートを借りて一人暮らしではなく、中間ステップとしての「共同生活」。ほどよい距離感のある、身近な他人同士の暮らしが、若者たちに自己成長を促す場面や機会をもたらします。スタッフが共に寝起きし、一人一人の成長を見守りながら基本的な生活スキルからコミュニケーション、仲間づくり、職業定着、余暇の過ごし方まで、生活を通じて体得のサポートをします。

#### にこまるソーシャルファーム＝よこはま型若者自立塾

よこはま型若者自立塾は、K2 が設立当初から実施している共同生活に「農業」の要素を加えた、横浜市と協同で実施している長期型（6ヶ月～）の合宿型プログラムです。

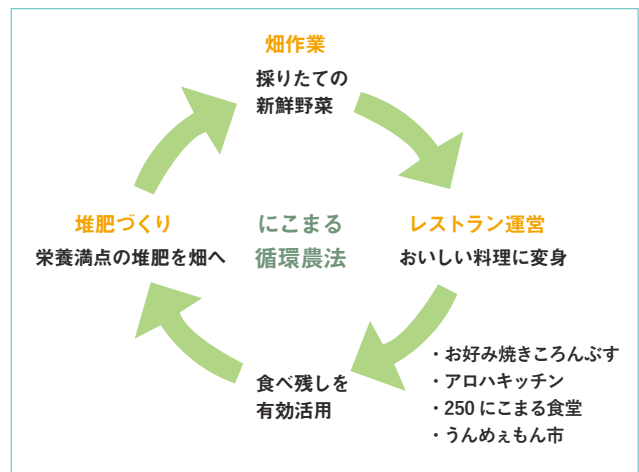
横浜市磯子区内にある寮とすぐ隣りにある畑を使い、共同生活と農業体験を通じて、若者たちに働くための力を取り戻してもらいます。

畑は「にこまるソーシャルファーム」と名付け、「にこまる食堂」他、K2のレストラン「お好み焼ころんぶす」や「アロハキッチン」などに収穫した野菜を提供しています。

### 農業体験の効果

農業体験をすることは、「働く」ことのきっかけづくりにはとても良いと思っています。

自分が畑を耕し、種や苗を植え、作物が育つ、収穫する。一連の作業が目で見えてわかるので、達成感があります。また、皆で一緒に働くことができるので、仲間もできやすいのです。さらに、K2では収穫した野菜をK2の食堂等で実際に活用できるので、やりがいもあります。



### にこまる食堂

K2グループでは、課題を抱えた若者たちの「働く場」をつくることも大切だと考えています。「にこまる食堂」もその1つで、食堂内では多くの若者がジョブトレーニングをしています。「にこまる食堂」自体のお客さんは地域の人たちであり、食堂の運営自体が「若者支援」の理解促進にもなり、その売上の一部は支援金として活用しています。

食堂メニュー価格：どなたでも 350 円～  
会費 1000 円（6 か月）の会員になった方は 250 円～

### 株式会社うんめえもん市

東日本大震災直後から、K2 の元スタッフが宮城県石巻市で被災したことをきっかけに、地域の復興を目指した活動を続けています。すでに震災から時間が経過していますが、「忘れないこと、続けること、進化する」とをモットーに、10年、15年といった長いスパンで地元の方たちとのつながりも大切にし、今では石巻に住所を移し生活する若



## K2 INTERNATIONAL GROUP MAP

根岸駅周辺に共同生活寮・相談事業所・食堂などを運営



者も増えてきました。当初のモットーも「石巻はおもしろい・石巻はチャンス・石巻で生きる」へと進化しています。

### 若者の就労・自立に重要な「家族の社会化」

長い間、社会との関係を失い、友人もおらず、両親などの家族が唯一のコミュニケーションをとる相手となってしまうと、若者と家族（特に親）の間に適切な精神的、物理的距離感を保てず、親子関係、兄弟関係が危機的状態に陥ってしまい、社会との壁がますます高くなっていく傾向があります。不登校やひきこもりの子どもや若者がいる家庭は、子どもや若者だけが当事者ではなく、家族も深く悩みを抱え、何とか事態を変えたいと思っていながら、どうすることもできない状態が続いていることが少なくありません。

だからこそ、私たちは、まさに悩みの中にある家族にも、支援の目をむけています。当事者である若者自身だけではなく、その家族に対し、支援を通じて生活の質の向上や社会参加を促すことで、家族関係を適正な状態にする手助けとなります。K2では、家族が悩みを相談し、社会との接点

を増やししながら元気を取り戻していくことで、若者自身にも良い影響があると考えており、その家族が主体となる「家族の会」や「家族ボランティア（ママコーチ）」の活動を大切にしています。親同士が集まり悩みの共有や対話を行うこと、自分の子ども以外の若者の課題に目を向けることは、目標とする「家族の社会化」にも、大きな役割を果たすと考えています。

### 神奈川県 SDGs 社会的インパクト評価実証事業

上記の通り、私たちは「家族支援」そのものが、若者の自立就労を支える重要な要素であると考えています。その中で、2018（平成30）年度に神奈川県で実施された「SDGs 社会的インパクト評価実証事業」において、K2の家族支援の効果の検証を行いました。

家族がK2の支援を受けて、元気になり、社会の中で役割を持って生き生きと生活するようになっていくには、いくつかの段階を踏む必要があること、その初期～最終期の過程の中で、K2の支援が果たす役割はどういったものなのか



ということの確認、また、現在の活動内容と効果は充分であるのかということなどを、社内で何度も検討しながら評価実証しました。

### おもしろい子(個)を育てる 放課後ドラマ “ぼによ+”

K2 インターナショナルグループでは、学童保育も行っています。以前は、横浜市放課後児童健全育成事業、学童保育「ぼによぼによ学童クラブ」でしたが、現在は、学校(教育)でもなく、家庭(しつけ)でもない、第3の育ちの場として運営する、K2の自主事業へと進化・発展しました。子どもたち自身がそれぞれお互いの個性を“おもしろがれる”ようになって欲しい。学校でもない、家庭でもない、自分が自分らしく過ごすことが出来、それを認められる場所。「放課後にこそドラマがある」という想いをこめて、「放課後ドラマぼによ+」という名称になりました。

ぼによ+では、“おもしろい子(個)を育てる”をモットーに、多様な人と出会い多様な体験を通して、自分の未来を、社会の未来も切り拓いていくチカラのある子どもたちの育成を目指した場づくりをしています。子育て期から青年期まで途切れの無いサポートを目指している私たちですが、かつて、不登校やひきこもりの当事者だった若者が、結婚し、子どもを授かり、ぼによ+を訪ねるケースもあります。

社会になじめなかった自分だけ、我が子には、多様な人の中で元気に育てて欲しいと思う、親としての気持ちが伝わります。また、元当事者が、保育士の資格をとって、スタッフとなっておもしろい子と一緒に育てる仲間となっているケースもあります。

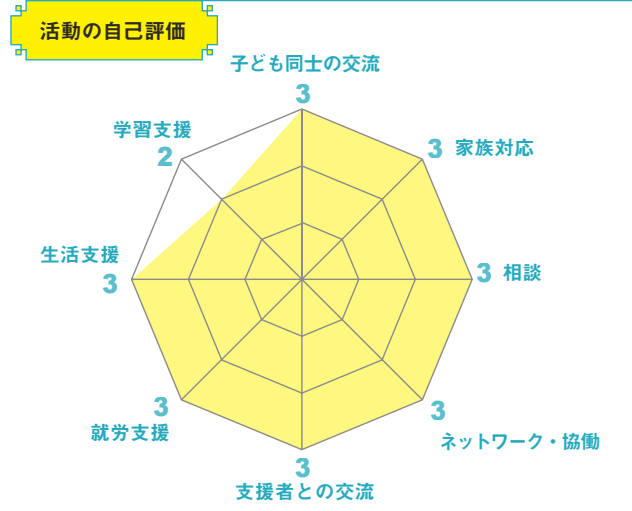


### “ぼによ+” 子どもに伝えたいこと

- ・勝ち抜くための力ではなく生き抜くための力
- ・何度でもやり直せる力
- ・自分で考え自分で判断する力
- ・免疫力
- ・フレキシビリティ
- ・ダイバーシティ(多様な人間関係)
- ・知識より知恵



放課後の居場所のレイアウトも工夫されている子どもたちに仲間ができて、たくさんの豊かな経験ができるように、という願いが込められている



K2インターナショナルグループは、発足からの30年以上継続的に不登校やひきこもりの子ども・若者の支援を行っており、その経過の中で、必要な取り組みを導き出し、実践している。そのため、活動はとても包括的。

### 団体の概要

ネットワークの力で若者支援を  
**K2 INTERNATIONAL GROUP**  
K2インターナショナルグループ

### 株式会社 インターナショナルジャパン

所在地 横浜市磯子区東町 9-9  
TEL 045-752-5066  
WEB <https://k2-inter.com/summary/>  
代表者 金森 京子  
開設年月日 1996年1月

### 活動内容

若者就労支援事業/オルタナティブ留学事業/ K2 フード部門 自営飲食店事業 その他事業/若者自立支援事業/子育て支援/障害福祉サービス/よこはま型若者自立塾

### 神奈川県 SDGs 社会的インパクト評価実証事業

<http://www.pref.kanagawa.jp/docs/bs5/documents/4.pdf>

## 10

# 地域みんなが自然のなかで 仲良くなる、楽しく遊ぶ にのみや子ども自然塾

中郡二宮町

key person



にのみや 三宅 栄子さん



## 二宮町の魅力と暮らす人たち

二宮町は人口約2万7千人の小さな町です。JR東海道線の駅はありますが、快速は止まりません。だからこそ、利便性が第一と考える人は暮らす場所として選ばないかもしれません。でも、海があり山があり、自然豊かなこの町には、若い人や家族が移り住んでくるケースがあります。住民同士、世代が違っていても、そういった価値観が似た人が多い地域なのかもしれません。にのみや子ども自然塾にたくさんの親子が訪れるのも、この地域で子どもたちに思いっきり遊ばせたいと思う気持ちが皆のベースになっていると思っています。

## 二宮ならではの社会資源を活用して誕生！ 「にのみや子ども自然塾」

幼稚園に勤めていた時から気になっている場所がありました。東京大学果樹園跡地。大学での研究を目的に開かれていた果樹園でしたが、2008（平成20）年に閉園し、その後、二宮町が購入した土地です。当時、この土地の活用方法について、検討会が開かれていました。私は、「自然豊かな場所で子どもたちを思いっきり遊ばせたい」「自分で考え自由に遊ぶことができる場を地域に作りたい」という気持ちがあったので、遊び場としてこの土地を使うこ

とが出来ないかと考えていました。定年退職してすぐ、「自然の中で子どもたちを遊ばせてあげたい」と声を上げると、幼稚園に通っていた子どもたちの親、ボランティア活動等を経て知り合った人等がスタッフとして集まってくれたんです。こうして2015（平成27）年7月、「にのみや子ども自然塾（以下、自然塾）」を任意団体として立ち上げることができました。

早速、東京大学果樹園跡地を子どもたちの遊び場として活用して欲しいと町に提案しました。すると、果樹園跡地の一部を活動日に貸出しするルールを町が作り、遊び場の活動ができるようになったのです。同じような志をもったプレイパークの活動者たちや、博物館の学芸員で昆虫観察の専門家、昔遊びの活動をされている方々など、さまざまな人や団体と連携をとり、知り合い、アドバイスを受ける機会なども得て、本格的なプレイパークの活動を始めました。

## 自然のなかで育まれる「生きていくチカラ」

自然塾では、果樹園跡地を借りながら、さまざまな形式の遊び場を定期的に提供しています。親子でも子どもだけでも皆で自由に遊べる「冒険遊び場」、小学生に向けて遊び場を提供する「にのっこプレーパーク」、未就学児を対象に遊び場を提供する「さとっこ」、「自然観察会」など、講師と



結婚を機に、二宮町で新生活を始める。3人の子どもに恵まれ、子育てをしながら、図書館での読み聞かせボランティアや人形劇などにも参加し、小さな町のなかで、たくさんの仲間もできた。幼稚園教諭と小学校教員免許を活かし、子どもが卒園した幼稚園で幼稚園経論としての仕事を始め、子どもたちがのびのび育つ保育を考え、実践。30年以上の二宮町での暮らしには、いつも子ども達や、それを取り巻く仲間たちがいて、今の活動につながっている。



共に過ごすことのできるプログラムを開催しています。

遊び場では、子どもたちは自由に遊びます。親子で楽しむもいれば、子ども同士で思い思いに過ごす子もいます。冒険遊び場ではスタッフはいますが、どんな遊びをするのか、どんな時間を過ごすかは、子どもたちに委ねられています。木登りをしてみたり、火を焚いてみたりと、普段の遊びでは体験できないことをやってみることができます。子どもたちのやることに禁止事項はほとんどありません。自身で考え、自身の責任で遊ぶ。それをスタッフたちで見守っています。

自由に遊ぶ中で、遊ぶための工夫をしったり考えたり、共に遊ぶ仲間の気持ちを察したり共感したり、“エラー”を繰り返すことで危険回避を学んだり…子どもたちにとって、さまざまな力を自然に身に着けていくことができる機会になっています。にのみや子ども自然塾はのびのびとした遊び場、そして学びの場です。遊ぶことで身に付けた力が、「生きていくチカラ」になる。そう信じています。

あるとき、参加していた小学4年生のT君は、小さい子



どもたちのために置いてあったタイヤを使ってブランコを作りたいとスタッフに聞いてきました。おじさんスタッフは、ロープをタイヤにつなげたり、木にぶら下げるために子どもを肩車してあげたりと手を貸します。高いところが怖い子どもも、ブランコ完成を夢見て大奮闘。おじさんに肩車してもらいなが

ら、木の枝にロープをかけたりと、一生懸命作業します。ブランコが完成したことで、T君は達成感、満足感でいっぱい、「今日は最高の一日だった!」とお母さんに報告したそうです。

子どもたち一人一人が、自分の「やりたい!」を見つけて、それぞれの方法で、工夫をしながら、それぞれのペースで実現させる。そんなチャンスが、自然の遊び場には溢れています。子どもたちは、その遊びを積み重ねる中で、喜びや達成感を感じます。また、友達や大人、さまざまな人と一緒に助け合うことも学んでいると思います。

### 応援する人や団体の広がり

遊び場は、子どもたちだけでなく、大人たちのつながりも生み出しました。さまざまな地域の人や子育て中の保護者たちが集まって始めた自然塾でしたが、参加する親たちや活動の様子を見かけた大人たちが活動に賛同し、スタッフとしても参加してくださっています。

さらに、地域のお店や子どもたちにさまざまな体験プログラムを提供できる人などの協力者も現れ、遊び道具の提供や新たなプログラムの開催など、子どもたちの遊びに広がりが生まれ始めています。「木工基礎講座」もそのひとつ。冒険遊び場で子どもたちが使う木材を提供してもらった家具工房さんとやり取りをする中で、子どもたちに木工を教えてもらえることになりました。

また、町内の小中学校の先生たちとも連携の輪を広げています。学校に登校できない小中学生のための教育支援室に通う子どもたちが果実園跡地にやってきて遊んだり、自然塾のスタッフが小学校に行き、「放課後子ども教室」の

### 地域の概況



#### 〈中郡二宮町〉

人口は約2万7千人。南に向かって広がっていくように、三角形になっているのが特徴。ミカン畑などの山の幸、相模湾からの海の幸と自然に恵まれた町。国道1号やJR東海道本線、東海道新幹線等の交通が入り組んでいる場所でもある。

### 団体の概要 にのみや子ども自然塾

所在地 中郡二宮町中里 518 東京大学果樹園跡地  
Eメール kodomosizen@yahoo.co.jp  
WEB <http://ninomiya-kodomo.sakura.ne.jp/>  
代表者 三宅 栄子  
開設年月日 2015年7月  
参加者数 2,500人(2018年度開催分)  
スタッフ 35人(自然塾の会員として所属)

活動日 プログラムごとに定期開催。  
活動内容 観察会や講座はホームページにスケジュールを掲載。





ために、遊び場を提供したりしています。子どもの遊びに関して、行政や子ども会などから協力を依頼されることもあります。

### 新たに見えてくる子どもたちのニーズと 人材養成の必要性

遊び場での子どもたちの様子を見て、「忙しい子どもが増えた」と感じます。習い事や塾で、放課後の時間や休日  
に自由な時間が少なく、子ども同士で遊ぶことも減っているように見えます。自然塾のスタッフたちは、果樹園跡地で遊び場を開いて待つだけではなく、さまざまな機会を通して、子どもたちに良い遊びの時間が得られるような活動

を心がけています。

一方、広がっていく活動に対し、ボランティアの不足も課題となってきました。大人は仕事や家庭などの都合で、毎回自然塾の活動に参加できるわけではありません。複数ある活動を役割分担を決めて進めることや、自然塾以外の関係機関との連携をつくることなども、今後自然塾が継続した活動を行っていくために必要で、大切なことになっていくと思います。

現在、遊び場の常設化を目指してプレリーダーの養成講座への参加をお願いする等、現在会員として活動に協力しているスタッフたちのステップアップも促しています。今後も広がっていく活動や、年々変化していく子どもたちの環境などを見ながら、スタッフたちでどう対応していくのが、今後の大きな課題のひとつです。



にのみや子ども自然塾

#### 冒険遊び場

隔月第3日曜日 10時～14時  
参加費：1人100円

「東京大学果樹園跡地」の自然をいっぱい使って遊びます。子どもたちは思い思いに活動！木に登ったり、工作したり、焚き木をやってみたり…。自分のペースで遊びながら、生きる力を育みます。「親子の遊び場」として開催しているので、大人も一緒に楽しむことができます。

#### にのっこプレーパーク

毎月第1日曜日 10時～16時

小学生を対象に開催しているプレーパーク。プレリーダーと共に、大自然の中で自分で考え工夫して自由に遊ぶことができます。

#### さとっこ

第2、第4火曜日 10時～13時 参加費：1家族100円  
0～3歳の子と親が遊び場を楽しむことができます！皆でお鍋を作って食事をしたり、子どもと一緒にのんびりとした自由時間を過ごすことができます。親同士の交流も！



#### 昆虫・自然観察会

年間4回  
講師をお招きし、果樹園跡内の自然や生息する虫たちなどを観察します。解説を聞きながら触れる自然には新たな発見があるかも？

#### 木工基礎講座

年1回  
木材をたくさん使って工作しよう。家具工房さんのアドバイスを聞きながら、自分だけの作品を作り出せ！

### 喜びを感じる子どもたちの成長

達成感や満足感、挑戦した経験を、子どもたちは遊び場の外でも発揮します。地域の公園で遊ぶ際にも、遊び場で見つけた遊び方を取り入れる子どもの姿も見られるようになりました。また、自然の中で遊ぶ機会が失われつつある今、その機会を求めて町外からも参加者がやってくるようになりました。これらは、活動を続けて見られた変化のひとつです。

子どもと共に参加する親にとっても、この遊び場はリラックスできる場所になっています。一緒に遊んだり、自然の中でのんびりしたり、親同士のつながりが生まれることもあり、遊び場は子育て支援の場としても成り立っているようです。

遊び場での遊びを通して広がっていく子どもたちの輪。遊び場の活動、運営を通じて広がっていく大人同士の輪。にのみや子ども自然塾は、人同士がつながり、影響し合うことで、新たな何かを得るきっかけの場として、遊び場を提供していきます。

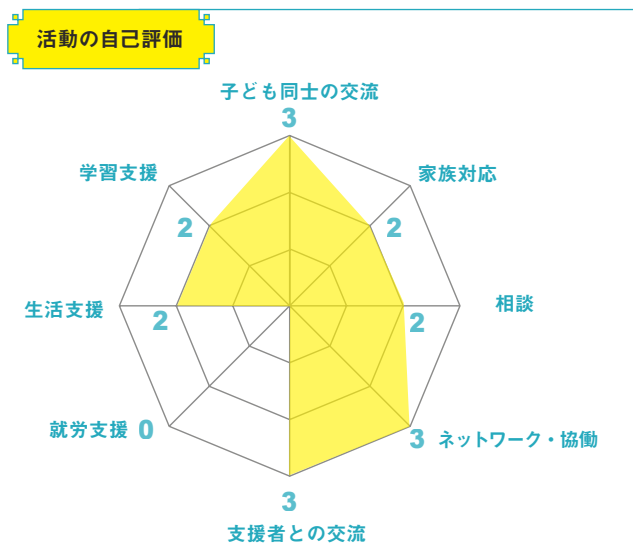
### にのみや子ども自然塾 スタッフ

小さな頃、原っぱが身近な存在でした。花冠をつくったり、野草を持って帰って天ぷらにしてもらった事を今でも憶えています。世の中には新しいものや場所がたくさん増えたいけれど、わたしの原点でもある“自然の中で過ごす”ということをも自分の子どもにも体験させてあげられるのはありがたい環境です。



子どもが小さい時期、特に一人目だと家にこもりがちだけれど、ここに来たらいつものスタッフがいる。お友だちもいる。お母さんの心の健康にもとても良いと思います。

そして自然の中で食べるごはんは最高です。自然の中で開催される自然塾の企画はこれから先も、ずっとあり続けて欲しいと思います。より魅力的な場所に進化して行くのも楽しみです。



効果把握	現状把握	<ul style="list-style-type: none"> <li>・群れて遊ぶ子どもを見かけなくなった</li> <li>・自然の中で遊ぶ子どもを見かけなくなった</li> </ul>
	地域の現状 インプット	<ul style="list-style-type: none"> <li>・町で活用方法検討中の「果樹園跡地」</li> <li>・同じく子どもたちに遊び場を与えたい気持ちを持った大人で集まる</li> </ul>
	具体的な活動 アクティビティ	<p>「果樹園跡地」での遊びの企画</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「自然観察会」などの講師を招く</li> <li>・他団体や行政への協力の呼びかけ</li> </ul>
	産出物 アウトプット	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プログラムの増加や拡大</li> <li>・新たな協力者</li> </ul>
	活動成果 アウトカム	<p>子どもたちの新たな遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・活動する大人同士のつながり</li> <li>・「支援教室」等との連携</li> </ul>
	生じた変化 インパクト	<p>子どもたちが自然の中で遊ぶ機会の提供</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者の憩いの場になることで子育て支援の場になった</li> <li>・移住者や町外の参加者が新たな関係を作るきっかけになった</li> </ul>

# 11

## 子育てが「まちの力」で豊かになる社会をつくる こまちぶらす

横浜市戸塚区

こまちぶらす 代表

key person



もり ゆみこ  
森 祐美子さん



### 自分の出産で感じた孤独感、不安感

活動を始めたきっかけは、自分の出産のときに味わった、何とも言えない孤独感、孤立感、不安感でした。それまでは、学校や職場というコミュニティが存在し、その中で自分の居場所や役割がありました。ところが、出産を機に会社を休み、突然なじみの薄い地域の中に入り、経験したことのない生活が始まりました。

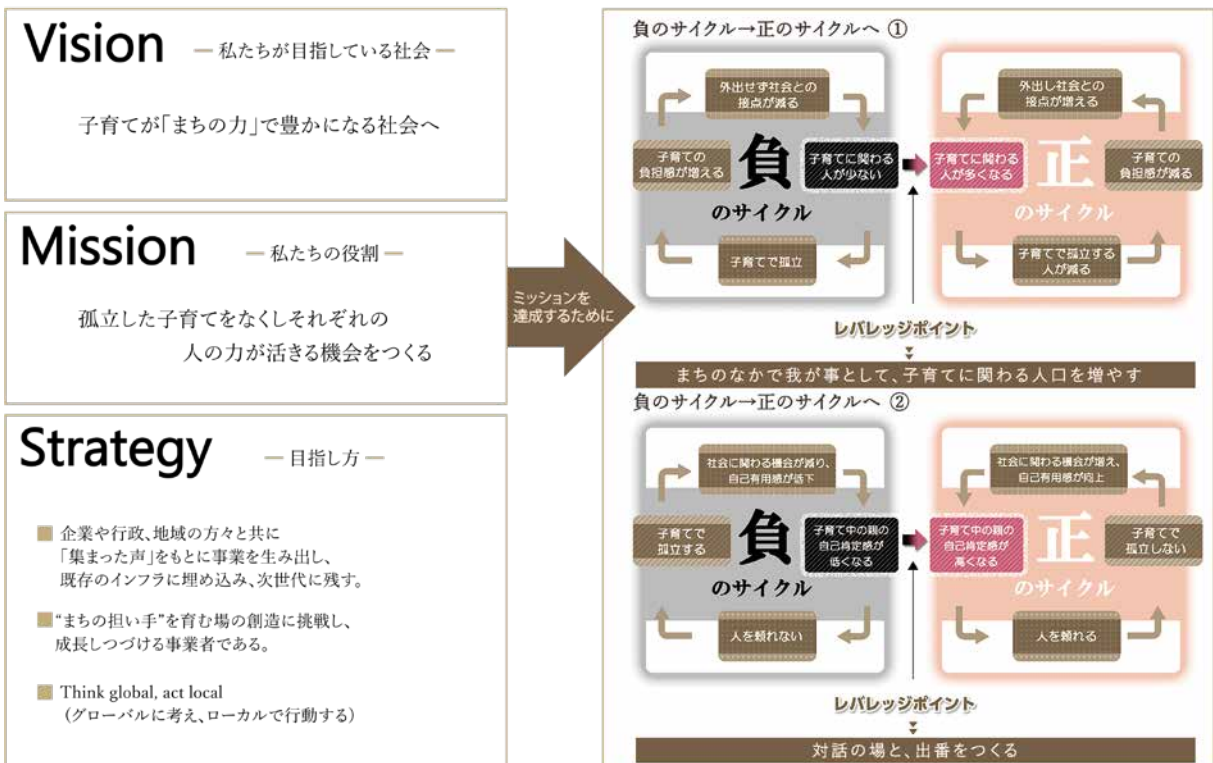
子育てがはじまり、子どもの小さな成長をゆっくりと待つこと。そんなことがとても大事ですが、それは、それまでの

自分が学校や職場で良しとされていた価値観（例えば「より速く、より多く、より強く」というようなもの）とは全く別の価値観です。子育て情報も世の中にはいっぱいあるけれど、何が正しくて、どんな暮らしが良いのかはわからない中で、自分自身リセットしなければならないと感じました。同時に、社会から取り残された感と、孤独感。次の自分を見つけることはそう簡単ではありませんでした。

そんな時、戸塚区の子育て支援拠点の立ち上げの情報を得て応募し、月一回、立ち上げの会議に参加する機会を得ました。子どもを連れて会議に参加する時、同じように参加していた、異年齢の地域の方々が、子どもを抱っこしてくれました。先輩ママさんでもある皆さんは、私の子どもに温かな眼差しを注いでくださいながら、母親の私の話もいろいろ聞いてくださいました。その時、久しぶりに「自分がそこに存在している」という新しい感覚を実感できたのでした。支援以上に「参加」が大きな力になると感じました。

「この感覚を皆と共有したい、いろいろな人が孤独を感じず、外に出てこられるようなものを作りたい」会議への参加を重ねることで、そういった漠然とした想いが強くなりました。

### こまちぶらすとは



2003年4月にトヨタ自動車に入社、海外営業や海外調査に従事。子どもの出産後孤立した子育てへの危機感を感じ2012年同社退職。ママ友たちと「こまちぶらす」を設立。2019年「認定NPO法人こまちぶらす」に。横浜市戸塚区に根差した居場所「こまちカフェ」の運営を中心に、子育てがたくさんの街の方の「我が事」となるようなプロジェクトを展開。



## Try and Errorの始まり スキルじゃなくて人として受け止められたい！



2人目の子どもの出産、育児休暇取得後、会社勤めに復帰しました。私が勤務していた会社は、私が子育てがしやすいよう、当時最大限の配慮をしてくれました。しかし、子

育ての今の環境をそのまま引き継ぎたくないという思いが捨てきれず会社を退職し、親子サークル、赤ちゃんサロンなどを一緒にやっていた仲間ママ友6人に声をかけて、こまちぶらすを立ち上げました。地域に誰でも気軽に來ることのできる居場所を作りたいという想いを実現するため、週1回、間借りしての活動スタートでした。「行政からの助成金などには頼らない」と思って始めたので、場所、お金、仲間、すべてに苦勞の連続でした。2度の移転もあったり、組織崩壊というピンチもありました。一方、ちょうどその苦しい時期に横浜市の「まち普請事業」に手を挙げて、幸運にも採択され、現店舗に移転することになりました。新たにメンバーを募り、時間をかけて話し合い、自分たちが今の場所で、商店会の人たちと一緒に「子育てを通して豊かなまちを創っていく」ことを目指して活動することの青写真がやっと描けたと思っています。

## いろいろなネットワークが私たちを支え広げる

活動の立ち上げ、活動の継続維持、活動の展開、どの側面を捉えても、私たちの活動には「ネットワーク」が必要不可欠でした。立ち上げ時は、ママ友たちとのネットワークや子育て支援拠点、区民活動センターなどさまざまな中間支援組織の既存ネットワークに助けられ、NPO法人としてのスタートの仕方、組織運営や事業展開、多様な世代との接点づくり等、活動していくことができました。

継続維持の場面では、一度組織として方向性を見失ってしまったときがありましたが、その時にもたくさんの方に支

えてもらいました。2014（平成26）年には横浜市「まち普請事業」に挑戦しましたが、そのコンペを勝ち抜く1年間弱、担当職員の方々が我慢強く伴走してくださいました。「自分たちは何をやりたいのか、何をすべきなのか」を仲間と明確化する機会を得ました。この時間は非常に大切な時間になったと思います。事業の明確化ができたことが、自分たちの進むべき方向を明確にし、活動の展開にも大きく役立ちました。また、そのコンペの最終発表時には、商店会やたくさんの地域の方が応援にきてくださってたくさん勇気もらったのも忘れられないことの一つです。

そして、戸塚の商店会の皆さんとのネットワーク。今の場所にカフェを構えてから商店会のいろいろな方とコミュニケーションを深め、活動を少しずつ一緒にするようになり、今では法人として事務局をつとめるようになりました。商店会として今は「こども・高齢者・障がいをもった人も誇りと居場所と出番を感じられる地域」というビジョンを掲げて活動していますが、子育てがまちで豊かになっていく社会を描いたときに、こういったネットワークで取り組んでいくことは欠かせません。

戸塚というエリアを活動拠点として得られたこと、戸塚を中心としてたくさんの方とのネットワークを得られたことが、活動基盤構築のための原動力となっています。



## 現状と課題

たくさんのスタッフやこまちパートナー（ボランティアメンバー）と一緒に事業をつくっています。働き方や働き甲斐、関わりたい範囲や度合いもさまざまです。でも多様な人がいるからこそ、「あの人になれば自分の話ができそう」と足を運んでくださる方が相性の合う人と会える確立も高まります。その多様な在り方を共存させながらも、目指している社会に向けて力強く進められるにはどんな組織づくりをし

### 団体の概要

comachi  
plus

### 認定NPO法人 こまちぶらす

所在地 横浜市戸塚区戸塚町145-6 奈良ビル2F  
TEL 070-5562-9555  
WEB <https://comachiplus.org/>  
代表者 理事長 森 祐美子  
開設年月日 2012年2月  
スタッフ数 45名 こまちパートナー 162名  
活動日 月～土 10:00～17:00

### 活動内容

- ① 適切な情報を届ける（地域子育てカレンダー、とつかの子育て応援ルームとここと情報スペース運営）
- ② 飲食の提供・居場所づくり「こまちカフェ」
- ③ 多様な人々の境的包摂を推進
- ④ レンタルスペースの貸出・haco+
- ⑤ つながり事業（ウェルカムベビープロジェクト、つながりデザインプロジェクト）
- ⑥ 提言・啓発



たらいいか、関わりのデザインがしていけるかが、これまでもこれから課題です。

### こまちカフェ

こまちぶらすが最初に目指した「子育て中のお母さんたちに居場所と情報を届ける」というメインの取り組みとして、こまちカフェは誕生しました。現店舗での営業は2014(平成26)年に開始しました。



お母さんたちに、両手を使ってゆっくりと、あたたかいうちに料理を食べてもらえるよう、平日のランチタイムには「見守りボランティア」がいて、赤ちゃんを抱っこしたり、店内で遊ぶお子さんを見守ります。

また、飲食のスペースには手づくり雑貨の販売、店内奥にはイベント用のスペースがあり、イベントを開催されたい個人や団体に貸し出しもしています。こまちぶらす主催の会も定期的に行っており、お子さんの発達が気になる方のための「でこぼこの会」、ダブルケアの方のための「ケアラーズカフェえんがわ」、不登校・ひきこもりの子をもつ方のための「ほっとひと息金曜日」といった「自分の思いを話せて、誰かの思いにふれる場」も作っています。

こまちカフェは、気軽に立ち寄りリフレッシュできる「カフェ」の機能と、その「場」から地域の担い手が育まれるという機能を持ち合わせる居場所で、活動の中心的な機能を果たす最も大切にしている事業です。いろいろな人が来て、スタッフとおしゃべりしたり、ゆっくりご飯を食べたりしています。そこで語られる何気ない会話や一人一人の表情から、その人のニーズやその人の可能性など貴重な情報が得られるので、その小さな情報を大切に、丁寧に拾い上げながら事業を企画したり、あるいはスタッフとしてのつながりを提案するなど、事業の維持発展のためにも大切な場となっています。

敷居の低さ、居心地の良さが、結果としていろいろな人のつながりを紡ぐ場所になっています。例えば、お母さんがカフェとつながることにより少し前向きになれると、一緒に来ていた子どももカフェで、人とのつながりができるなど、年齢を問わずいろいろな人の日常のつながりを育てる居場所となっています。



店長の守家 文子さん

### つながりデザインプロジェクト

飲食やイベントなどをきっかけに「こまちカフェ」を訪れた方々が、新しい社会との出会いのきっかけとなり、自分のやりたいことを見つけ、やがて「地域の誰かの役に立つ」までの循環を生み出す取り組みとして、「こまちパートナー

というボランティア登録制度を実施しています。カフェという日常に近い場で、その居場所の登録ボランティアになり、居場所の中で少しずつ自身の活躍のチャンスを見つけ、そしてやがて「まちの担い手」に「いつの間にならっていた」ということを目指しています。こまちカフェという場を通じて、いろいろな人に出会い、コミュニケーションをし、意欲や想像力が満ちた時、新たな実践者としてともに活動する仲間を少しずつでも増やしていきたいと思っています。現在スタッフ約45名、こまちパートナー約160名、その他さまざまな形で多くの方が活動に関わってくださっています。

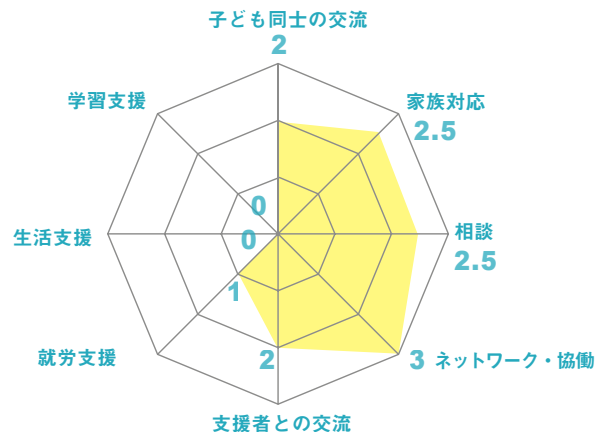
こまちパートナーの方々の「やってみたい」が実現したイベントや取り組みもたくさん生まれ、こまちぶらすの活動がより豊かになっています。

### とつかフューチャーセッション

立場の違いを超えて人々が集い、社会的課題をさまざまな角度で見つめ、対話し、協業する場を継続的につくるために「とつかフューチャーセッション」というワークショップを「子育て」「介護」「障がい」をテーマに2016(平成28)年度より開催しています。ゲストスピーカーの講演や、当事者の声を通したワークから、「自分に何ができるか？」と一緒に考えています。また、法人のビジョンと共に「目指し方」として掲げている“Think global, act local”にもつながる取り組みとして、2018(平成30)年度は「海の向こうの声」も集めて、自分たちの地域の在り方を海外の現状や当事者の声に触れながら対話を深めるという試みも行いました。このような対話のきっかけづくり、あるいはテーマの明確化のためのツールの開発にも、時間をかけて取り組んでいます。



### 活動の自己評価



## 編集後記

居場所での、一人一人の子どもや若者のエピソードを、本紙で、詳しくご紹介することは、個人情報への配慮もあり難しかったのですが、どの居場所にも、子どもや若者と担い手の方々との間にドラマがありました。要求や希望を、ことばにして他人に伝える力が不十分であったり、挨拶ができなかったり、人間関係の持ち方、コミュニケーションの取り方も未熟な子どもや若者が居場所を訪れます。貧困等、多様な要因によって、家庭そのものが社会から孤立し、より一層、そうした力が育ちにくくなっている中、他人からの声かけを、すぐには受け入れられない子どもや若者もいます。

そんな子どもや若者と、居場所が、担い手の皆さんが、心の距離も物理的距離も少しずつ近づけ、信頼を築いていく、安心とともに、未来に期待を持ちながら主体性が育つ、その過程にドラマがあります。担い手の皆さんの人間力と子どもたちが備えている人間力が、つながったときに、あの笑顔があるのだと感じました。

私たち、編集者にとって、事例集の取材は大変貴重な経験になりました。全ての居場所が、今後も子どもや若者のよりどころとなり、地域社会で自分らしく活躍する大人に成長することを願い、編集後記とさせていただきます。

## お知らせとお願い

子ども・若者にとっての居場所がいかに大切なものなのかを広く社会に発信していくこと、そして身近なところで具体的な活動が広がっていくことを目指し、「子ども・若者の居場所づくり」をテーマに、事例集の発行とフォーラムの開催を3年間継続して行ってきました。この形での活動は、今年度で一区切りいたしますが、今後も居場所づくりをはじめとした子ども・若者の育ちと自立を支える取り組みについて、発信していく予定です。

### 今後の予定

2020年1月29日 第4回フォーラム開催

この事例集を読まれた感想、子ども・若者の居場所づくりの取り組みについて共有したい課題、活動に取り組んで気が付いたこと、身近なところで活動しているグループ等の紹介など、下記まで情報をお寄せください。

**Eメール: [ibasyo@knsyk.jp](mailto:ibasyo@knsyk.jp)**

(お問合せ) 社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会 企画調整・情報提供担当

TEL 045-311-1423 FAX 045-312-6302 URL <http://www.knsyk.jp/>

## KANAGAWA CASE BOOK 2019

### 子ども・若者の居場所づくり事例集

企画・取材・編集	NPO 法人 よこはま地域福祉研究センター 社会福祉法人 神奈川県社会福祉協議会
デザイン・DTP	NPO 法人 よこはま地域福祉研究センター
取材協力	いせはらみらい クルリンこども食堂／陽向舎／在日外国人教育生活相談センター 信愛塾／ たまめし食堂+たまふろ／ Art Lab Ova／おだていカフェ／あおぞら文庫／つばき学習会／ K2 インターナショナルグループ／にのみや子ども自然塾／こまちぶらす
協力	社会福祉法人 神奈川県共同募金会
発行日	2019年12月24日
発行者	社会福祉法人 神奈川県社会福祉協議会



この冊子は、赤い羽根共同募金の配分金により作成されました。

